

事項七 日仏通商航海条約改定交渉

一七五 一月七日 在サイゴン古谷領事ヨリ
幣原外務大臣宛（電報）

日本・インドシナ間関税改正問題ニ関スル總
督ノ諮問ニ対シサイゴン商業會議所回答ノ件

第一号（極秘） （一月七日接受）

当地商業會議所ハ日印間関税改正ニ関スル總督ノ諮問ニ対
シ最近個々ノ商品ニ付意見ヲ述フルコトヲ止メ印度支那ノ
商工業ノ利益ヲ害セサル範圍ニ於テ適當ノ措置ヲ執ルコト
ヲ總督ニ一任スルコトニ決定シ其ノ旨總督ヘ回陳セル趣ナ
リ内密聞込ノ儘
在仏大使ヘ転電シ海防ヘ暗送セリ

一七六 一月十日 幣原外務大臣ヨリ
在仏国石井大使宛（電報）

インドシナへ答礼使特派ノ際場合ニヨリテハ

関税問題ニツキ内協議ヲ進ムルコトアルベキ

旨通報ノ件

第八号（極秘）

往電第四二四号ニ関シ
（編註^一）

一、山県公一行及「クロードル」大使一月二十四日出帆ノ
筈ナリシカ一兩日前「メルラン」總督ヨリ「クロードル」
大使ニ対シ「キルシェー」氏ハ阿片會議ノ為二月末ニア
ラサレハ河内ニ帰還シ得サル旨電報アリタル趣ヲ以テ同
大使ヨリ一行ノ出発ヲ約二週間延期スル趣旨ヲ以テ總督
ト交渉シ度キ旨申出テタルニ付右ニ同意シ置ケリ

二、「クロードル」大使ノ意向ハ往電第四二二号ノ通ニテ
（編註^二）
今回我使節河内訪問ノ機會ニ於テ是非トモ関税問題ニ付
テモ内協議ヲ進メ大使自身ニ於テモ之レカ為メ十分努力
セントスルニ在リ隨テ我一行ノ彼地滞在在中是非「キルシ
エー」ヲ帰ラシムル様取計ラヒ居ル次第ナリ

三、貴電第五七五号ニ拠レハ仏本国当局ハ貴地ニ於テ印度
支那関税問題ヲ解決セントスルノ意向ヲ有スル趣ナルノ
ミナラス事ノ性質上最終ノ解決ハ貴地ニ於テ仏国政府ト

ノ間ニ之ヲ為スハ勿論ノ次第ナルカ一面ニ於テ「クロー
デル」大使ニ於テ前記ノ如ク意気込ミ居レル以上同大使
希望ノ如ク河内ニ於テ「キルシェー」ト内協議ヲ進メ得
ルノ機運生シタルトキハ我ニ於テ之ニ順応シ得ル丈ケノ
準備ヲ整ヘ置クヲ適當ト認メ佐分利通商局長ヲ首席隨員
トシ別ニ大藏省関税係官一名ヲ一行ニ加ヘ置クコトニ内
定シタリ

四、従来我方ニ於テハ印支トノ関税問題ニ付テハ我方ヨリ
一般のニ最低税率ヲ受クルコトヲ主張シ来リ昨年当地ニ
於テ「キルシェー」トノ談合ノ際ニモ此ノ主義ヲ捨テサ
リシ次第ナルカ右ハ印支トシテハ余程同意ニ困難ナルモ
ノノ如クナルニ付事宜ニ依リテハ従来ノ主張ヲ幾分緩和
シ大体左ノ如キ方法ヲ以テ将来協定ノ基礎ト為スモ已ム
ヲ得サルヘシト思考シ居レリ

（イ）印度支那ヲ日本ト仏本国トノ通商条約ニ加入セシメ税
率ニ付テハ該加入条約ニ依リテ日本仏本国間ノ税率トハ
別個ノモノヲ日印間ニ協定スルコト

（ロ）日本ト印度支那間ノ関税ニ付テハ互ニ利害關係多キ殆
ント一切ノ品目ニ付キ特ニ税率ヲ定メ自余ノ品目ニ付テ

七 日仏通商航海条約改定交渉 一七六

ハ最低税率ノ許与又ハ最惠国待遇ノ付与ニ関スル従来ノ
我主張ヲ固持セサルコトトス即チ単ニ五月二十六日付通
送機密第一〇号付属議事録付属表ノ如キ表ヲ作製スルコ
トニ止メ且ツ通商關係ノ變動ニ応スル為必要ニ応シ相互
ノ合意ニ依リ隨時品目ヲ加除スル為協議ヲ行ヒ得ルノ余
地ヲ存スルコトトス尤モ右ハ我国ト印度支那間ノ税率ニ
関スル方針ニシテ仏本国日本間関税問題ニ関スル無制限
最惠国待遇享受ノ我方従来ノ主張ニハ何等變動ナキ次第
ナリ從テ最終ニ貴地ニ於テ決定セラルヘキ細目ノ「フォ
ーミュラ」等ニ付テハ列国トノ交渉ニ支障ヲ来ササル様
措置スヘキハ勿論ナリ

（イ）前記（ロ）ノ方針ノ結果トシテ先方ニ於テハ彼我貿易品ノ
性質上ノ差異ニ鑑ミ或ハ之ニ依リ我國ノ印度支那ニ於テ
得ヘキ利益ト印度支那ノ我國ヨリ得ヘキ利益トノ間權衡
ヲ失ストノ理由ヲ以テ先方ヨリ日本ト仏本国トノ税率協
定ノ折ニ之カ調節ヲ為サムコトヲ申出ツルニ於テハ出来
得ル限り之ニ応スルコトトスヘシ

就テハ前記諸項ニ付キ御意見乃至御氣付ノ点折返御回電相
成度シ

編註1 「日本外交文書大正十三年第二冊」事項五―二〇八文

書参照

2 同右二〇七文書参照

3 同右一八五文書参照

一七七 一月十三日 在ハイフオン森領事ヨリ
幣原外務大臣宛

山県特派使節ニ対スルインドシナ商工界ノ意

向ニ関スル件

通送機密第一号 (一月二十九日接受)

大正十四年一月十三日

在海防

領事 森 新一(印)

外務大臣男爵 幣原 喜重郎殿

特派使節ト印度支那商工界ノ意向ニ関スル件

山県公渡来ノ件ニ付当地「クーリエー・ダイフオン」紙カ「之レヲ以テ日本カ如何ニ今回ノ印度支那来訪ニ重キヲ置キ居ルカカ一層好ク証拠立テラル」ト言フ別紙^(省略)切抜ノ如キ小記事ヲ掲ケタル外他ノ当地方新聞紙上ニハ未タ何等ノ批評ヲ散見致サス候

第二六号(極秘)

(一月十五日接受)

貴電第八号ニ関シ

一、仏国ノ対外通商交渉権ハ今日ノ処商務省ノ手中ニアリ同省トシテハ外国輸入品ノ防止及自国輸出販路ノ拡張ヲ旨トスルカ故ニ態度硬化のナルヲ免レス而シテ他省ハ容易ニ容喙シ得サルヤニ觀セラルルニ付日仏交渉ニ於テモ外務省側ノ干渉ナキ限リ急速解決ハ困難ト認メラル

二、内協議ノ御方針中(四)ニ依レハ互ニ特定品目ニ付税率ヲ協定シ爾余ノ品目ニ付テハ我從來ノ方針タル最惠国待遇主義ヲ放棄スルノ御意向ナルカ如キ処右放棄ハ部分的ナルニセヨ又特殊ノ「フォーミュラ」ヲ作成スルニセヨ仏国側ハ印度支那ニ関シ最惠主義ヲ放棄シ得ル以上仏本国ニ付テモ之ヲ放棄シ得サルノ理由ナシトテ仏本国トノ交渉ニ際シ之ヲ強要スルニ至ルヘシ然ルニ日仏条約中関税ニ関スル規定ニ付仏国当局ハ暫定取極ノ締結ニ異議ナカルヘキハ客年往電第五二五号「セルイス」ノ談ニ依リ略ホ推知シ得ラルル次第ナレハ若シ印支関税ニ付テモ暫定取極ヲ基礎トスル方針ニテ協定スルトセハ我方ノ最惠主義ヲ維持シ別ニ特定品目ニ付税率ヲ協定スルコト左迄因

七 日仏通商航海条約改定交渉 一七八

客臘十四日(即チ特派使節確定前)本官河内ニ赴キタル節「グラヴィッツ」氏ヨリ聞ク処ニ依レハ總督ハ同氏ニ向ヒ日本派遣委員来訪ノ節ハ宜シク殷懃ニ之レヲ遇セサルヘカラスト注意スルト同時ニ總督府ニハ金ナキニ付費用ハ出セヌト云ヒ渡シタル由同氏笑テ本官ニ語リ「Rien à craindre, C'est la vieille politesse française」ト付言致シ候尚ホ同氏ノ語ル所ニ拠レハ東京セメント会社(東京ニ於ケル最重要ナル工業会社ノ一)ハ日本派遣委員ノ參觀ヲ拒絶スヘシト意気込ミ居リ候由、山県公一行渡来ノ曉ニハ總督府ニ於テ之レヲ遇スルニ遺憾無キコトハ勿論總督ノ意ヲ体シテ行ハルル市及商業會議所等ノ催ス正式ノ接待振リニ就キテモ前記「グ」氏ノ言フ通りニ相違ナカランモ總督ノ懸念ト此一セメント会社ノ態度トハ我「特派使節」ヲ待ツ印度支那商工界ノ心理ノ一端ヲ窺ヒ知り得ル儀ト思考致スニ付御参考迄ニ報告申進候 敬具

一七八 一月十四日 在仏国石井大使ヨリ
幣原外務大臣宛(電報)

インドシナ関税問題ニ関スル内協議方針ニツ

キ意見具申ノ件

難ナラサルヘシト觀測セラルルモ今次答札使往訪ノ機会ニ内協議ヲ進メ得ルコトモナラハ從來ノ御方針ニ則リ専ラ税率ニ関スル協定基礎案ヲ作成スル様致度御来示ノ方針ハ当地ニ於ケル交渉ノ際ノ最後ノ讓歩案トシテ保留スル方得策ナリト認メラル尚商務省側ニ於テ本件加入問題ノ急速解決ヲ欲セサルハ其本国品ニ付待遇ヲ得ントスル懸引ニ利用セントスルニアルハ明瞭ナルニ付御来示ノ如ク対償ノ意味ニテ待遇許与方ヲ表明スルハ先方ノ思フ壺ニ嵌ル所以ナレハ此際之カ明示ヲ努メテ回避シ唯日仏間ノ通商ヲ密接ナラシムル為メ本国品ニ付特ニ協定税率ヲ許与スルヲ辞セスト声明シ置ク方然ルヘシト存ス

三、本使ノ所見ヲ坦懷ニ披瀝セハ本件加入問題ハ十數年來ノ懸案ニ付解決ノ困難ナルハ論ナキモ仏国ハ「アルサス、ローレン」兩州ノ復帰ニ依リ一躍世界的鉄産国トナリ輸出奨励熱旺盛ニシテ対日輸出ニモ無關心ナルヲ得サルハ商務当局ト雖モ自認シ居ル次第ナレハ事情既ニ本問題ノ解決ニ一歩ヲ進メタルモノト思考スルモ之カ解決ニハ時ヲ藉シ先方ノ自発的行動ヲ待ツコト最モ有利ナルヘシト存ス

編註 「日本外交文書大正十三年第二冊」事項五—二〇二文書

参照

一七九 一月二十日 閣議決定

山県特派大使ニ対スル訓令ニ関スル件

付 記 一

大正十三年十二月十一日在ハイフオン森領事
発幣原外務大臣宛通送第一五〇号

答札派遣委員ニ関スル件

二 山県特派使節隨行者

山県特使ニ対スル訓令

今回閣下ヲ特派使節トシテ仏領印度支那へ御差遣相成ルハ
過般メルラン總督カ
摂政殿下御婚儀ニ対スル祝辞言上並震災ニ対スル見舞ノ為
メ来朝シタルニ対スル答札ノ趣旨ニ有之候得共同時ニ此ノ
機ニ於テ我国ト仏蘭西本國並ニ仏領印度支那トノ間ノ親善
關係ヲ増進シ特ニ我国ト印度支那トノ經濟的接近ニ資セン
トスルモノニ有之候間右様御承知ノ上大体左記ノ通御措置
相成度此段申進候也

一、過般本邦未曾有ノ震災ニ対スル世界各国ノ同情ハ翕然
トシテ集マリ物質的ニ將又精神的ニ罹災地方ノ復旧ニ資

リ就テハ閣下ハ右會員諸氏ノ計画其ノ他ニ付キ篤ト事情
御聴取リノ上適當ト認メラレタル範圍内ニ於テ其ノ目的
達成ニ必要ナル援助及指導ヲ与ヘラルル様致度シ

(欄外註記)

大正十四年一月二十日山県公へ手交済

(付 記 一)

大正十三年十二月十一日在ハイフオン森領事発幣原外務大臣

宛通送第一五〇号

答札派遣委員ニ関スル件

通送第一五〇号

(大正十四年一月七日接受)

大正十三年十二月十一日

在海防

領事 森 新一(印)

外務大臣男爵 幣原 喜重郎殿

答札派遣委員ノ件

印度支那ニ対スル我答札派遣委員ノ件ニ付テハ貴電第二八
号ヲ以テ御来示ノ次第モ有之候処右委員一行ハ愈々一月十
五日頃東京出發ノコトニ確定シタル由本官去月三十日河内
ニ出張ノ際總督府政務部長「ジャンブロー」氏ヨリ及聞候
接待予定トシテ同氏ノ語ル処ニ依レハ右一行ヲ七日間東京
七 日仏通商航海条約改定交渉 一七九

シタル所極メテ多大ナリシハ言ヲ待タス就中仏本國及仏
領印度支那官民ノ同情ハ深甚懇篤ヲ極メ殊ニ仏領印度支
那總督カ親シク弔意ヲ齎ラシタルニ付テハ閣下ハ帝國政
府及國民ノ名ニ於テ深厚ナル謝意ヲ表示セラレ度シ

二、帝國ト仏本國及仏領印度支那トノ間ノ交誼ハ世界ノ大
勢ニ鑑ミ今後益々敦厚ヲ加ヘサル可カラス就中仏領印度
支那ハ地域我國ト極メテ接近スルノミナラス其ノ住民ノ
巨多ナルコト、原料品生産ノ豊富ナルコト、我國主要食
料品タル米産額ノ至大ナルコト等ニ鑑ミ帝國政府ハ同仏
領トノ經濟的接近ニ重キヲ置クモノナリ

此見地ヨリ明治四十年以来仏領印度支那ノ日仏通商条約
加入兩國間ノ懸案トナリ居レルモ未タ其ノ目的ヲ達セス
客年メルラン總督来朝ノ機會ニ於テ彼我双方ノ間ニ非公
式會談ノ結果始テ稍ヤ解決ノ曙光現ハルルニ至リタルハ
甚タ慶スヘキ所トス固ヨリ本問題ノ終局的解決ハ巴里ニ
於テ商議スヘキモノナルモ閣下御渡航ノ際適宜彼地官憲
ト非公式ニ折衝セラレ差支ナシ

三、閣下御渡航ノ機會ニ於テ印度支那協會會員有力者ハ印
度支那トノ經濟的接近ノ目的ヲ以テ閣下ト同行スル筈ナ

州ニ滯メ夫レヨリ陸路安南、交趾支那及東藩塞迄案内スル
コトト相成居リ候由ニテ此日程約一ヶ月ヲ要ストノコトニ
有之其準備ニ取掛ル為メ差当リ人数ヲ知ル必要有之「クロ
ーデル」大使ニ打電シタリト語り候尚ホ一行人選定マリ次
第新聞ニ報道スル必要アルニ付各員ノ写真及ヒ「ノート」
ヲ可成速ニ入手シタキモノナリト本官ニ希望申出候依テ同
氏希望ノ次第ハ本省ニ伝達致シ置クヘキ旨答置候此儀可然
御取計相成候様致度候

本件ニ関シテハ曩ニ拙電第五九号ヲ以テ時機尚ホ早カラサ
ルヤノ儀ニ付本官所見申進置候次第モ有之候処昨今当地方
対日輿論ノ趨勢稍良好ニ向ヒ候コトハ別信機密送第一八号
ニテ申進候通りニ有之候ニ付此際右委員ノ渡來カ悪影響ヲ
及ホス等ノ懸念ハ最早ヤ無之カルヘシト思考致シ候
尚ホ「ジャンブロー」氏ハ牧田環氏カ一行ニ加ハランコト
ヲ欲シ居リ候勿論同部長ノ個人的希望ニ過キス候得共御參
考迄ニ併セテ申添候本官ノ見ル処ニ於テモ同氏ハ先般日本
行ノ一行ニ殊ニ氣受ケ宜敷候ニ付可成実現ヲ希望致シ候

本信写送付先

敬具

在仏石井大使 在西貢古谷領事

(付記二)

山県特派使節隨行者

山県特派使節隨行者

外務省通商局長	佐分利 貞男
外務事務官	宮腰 千葉太
同	松島 鹿夫
外務省翻譯官子爵	本野 盛一
大使館理事官	友田 二郎
外務省嘱託	松岡 新一郎
大蔵技師	栗山 正雄
陸軍砲兵少佐	町尻 量基
海軍少佐	加治木 智種
農商務技師	右手 寛太郎
台灣総督府事務官	中瀬 拙夫
医学士	野村 華造

以上

一八〇 一月二十三日

幣原外務大臣ヨリ
在独国本多大使宛(電報)

特派派遣ハ經濟的接近ヲ図ルタメナル旨通報

ノ件

第一〇号(極秘)

昨年五月本邦震災ニ対スル見舞並ニ摂政殿下御婚儀ニ対スル祝辞言上ヲ兼ネ仏領印度支那總督メルラン氏ノ来朝セルニ対スル答礼ノ意味ニテ山県公爵ヲ御差遣ノコトトナリ一行ハ一月二十三日出發セリ此機會ヲ以テ同地ニ於テ彼我ノ經濟的接近ヲ図ル為メ実業家ノ代表者モ之ト同行スル次第ナルカ右使節ノ使命ハ何等政治的目的ヲ有スルモノニ非ス然ルニ從來貴任国ニ於テ日仏間ノ關係ニ付動モスレハ猜疑的風説ノ流布セラルルコトアルニ付前記ノ事實御含ノ上適當ノ機會ニ於テ誤解ヲ解カルル様致シ度シ

本電參考トシテ英、米、仏、伊、白へ転電アリタシ

一八一 一月二十四日

幣原外務大臣ヨリ
在仏国石井大使宛(電報)

インドシナ關稅問題ニ關スル貴見ニハ同感ナ

ル旨回報ノ件

第二七号(極秘)

貴電第二六号ニ關シ

往電第八号後段ハ単ニ我方結局ノ肚ヲ極メ置ク趣旨ニ過キス且ツ終局ノ解決ハ貴地ニ於テ行ハルルモノナルニ依リ貴電御申越ノ趣旨ハ当方ニ於テ全然同感ナリ往電第八号ニ關

シ第四項ノ通り我方ハ一般の最低稅率ヲ享クル主張ヲ捨テサリシニ拘ハラス總督ハ印度支那帰還後為セル演説等ニ於テ宛モ我方ニ於テ從來ノ主張ヲ緩和シタルカ如キ口吻ヲ洩シ居ルハ先方内政上ノ理由モアルヘシト想像セラル就テハ本件根本主義上ノ問題ハ凡テ巴里ニテ決定スヘキモノトシ之ニ触レシメサル積リナリ

一八二 一月二十七日

在仏国石井大使ヨリ
幣原外務大臣宛

インドシナノ日仏通商条約加入問題ニ關シ仏

国ノ世論報告ノ件

機密公第一〇号

(三月十三日接受)

大正十四年一月二十七日

在仏

特命全權大使子爵 石井 菊次郎(印)

外務大臣男爵 幣原 喜重郎殿

印度支那加入問題ニ關スル当地輿論報告ノ件

本件問題ニ關スル当地輿論ノ趨勢ハ客年往電第四九四号申進候通ニテ大新聞ハ依然トシテ沈黙ヲ守リ印度支那商工委員会ト密接ナル關係ヲ有スル「デペーシユ・コロニアル」

七日仏通商航海条約改定交渉 一八二

紙独リ其ノ後兩三回反日記事ヲ掲載シタルニ過キサリシ処一月二十一日同紙ハ第一面冒頭ニ日仏兩國間ノ交渉ヲ阻害セサランカ為爾後本問題ニ關スル論評ハ之ヲ差控フヘシ但シ仏国政府ニ於テ利害關係者ノ意向ヲ聴取スルコト及吾人同志ヲ犠牲トセサルコトヲ条件トストノ記事ヲ掲載致シ候今日迄ノ処反日論者トシテ表面ニ立チ居ルハ印度支那關係ノ諸会社重役タル「オンベール」(Octave Homberg)氏ニシテ印度支那商工委員会及印度支那銀行ヲ背景トシ其ノ言説モ多クハ前記「デペーシユ」紙上ニ掲載セラレ居リ候処同氏ハ印度支那ニ赴キタルコトモナク從テ其ノ所論ハ常ニ仏本国ヲ主眼トシ其ノ目的ハ個人的利益ヲ擁護スルニ在ルモ同氏ノ個人的勢力ハ強チ輕視シ得サル由ニ候然ルニ最近下院植民地委員會ニ於テ印度支那銀行特權繼續ニ關スル法律案審議ノ際同法案報告者「アングルヴァン」氏(仏領印度選出)ハ日仏協調論ヲ高唱セルヤニ有之又一月十九日「ルーヴル」紙ハ印度支那ニ於ケル新發券銀行設立ノ計画アル旨ヲ報シ右計画ハ巴里和蘭銀行ノ指金ニ出ツルモノトノ噂ニ有之孰レニシテモ印度支那商工委員会カ從來ノ如ク独リ天下ヲ極メ込ムヲ得サルニ至リタルハ注目ニ値スト存

二五七

シ候尚前記「デペーシユ」紙力減黙主義ヲ執ラサルヘカラサルニ至リタルハ政府筋ノ圧迫ニ依ルモノナルヘキ処茲ニ奇異ナルハ現政府反対党機関新聞紙タル「リベルテ」紙カ一月二十三日突如反日記事ヲ掲載シタルコトニ有之候但シ同紙社主 Camille Aymard ハ嘗テ西貢ニ於テ公証人タリシコトアリ印度支那選出「ウトレー」氏ト別懇ノ間柄ノ由ナレハ右記事ハ從來ノ反日運動ト何等カ関連ヲ有スルニ非スヤト察セラレ候

關係新聞記事写相添ヘ此段及報告候 敬具

本信写送付先 在里昂、西貢

海防各領事

一八三 二月六日 在ハイフォン森領事ヨリ
幣原外務大臣宛（電報）

関稅率ニ関スル大蔵省修正案ニツキ意見具申ノ件

第六号（極秘） （二月七日接受）

在仏大使発本官宛電報転電ス

第一号

大臣宛第六二号

客年貴信機密第三五号ニテ御送付ノ大蔵省修正案ハ現在輸出品而已ナラス将来輸出ノ見込アル商品ヲモ列挙シ個別的ニ特別稅率又ハ最低稅率若ハ其ノ中間稅率ヲ保障セシメントスル御趣旨ナルカ如キ処右ハ貴電第二七号ニハ從來ノ御方針タル最惠國待遇ノ主張ヲ放棄スルノ御意思ニハ非スト信スルモ最近当地「ユニオン・コロニアル・フランセーズ」ノ書記長在海防森領事發通總第一〇〇号付属對照稅率表ヲ持參シ綿糸綿布類ニ関スル我方ノ真意ヲ求メ來レルニ付右ニ関スル限り運賃ノ差額ヲ見越シニ割増ニ枉ケテ承諾スルモノナリト説明セシメタルニ若シ更ニ何分ノ讓歩ヲ得ハ綿糸布業者ハ反日運動ニ加担セサルヘシトノ意ヲ漏シタル趣ナリ同組合ヨリノ交渉カ商務省辺ノ指金ニ出ツルヤ否ヤハ追テ確カムヘキカ思フニ印度支那ニ於テニ割増見當ニテ大部分ノ品目ニ付協定ヲ得ルモ当地ニ於テ更ニ讓歩ヲ求メラルヘキハ予想ニ難カラス依テ若シ内協議行ハルル際ハ貴電第二七号ノ御方針ニ依ラルルハ勿論所謂ニ割増協定品目ニ付テモ其ノ數ヲ出來得ル限り局限シ置クコト絶對必要ナリト信ス

大臣ニ転電アレ

一八四 二月七日 在ハイフォン森領事ヨリ
幣原外務大臣宛（電報）

インドシナ總督邸晚餐會ニ於ケルメルラン總督ノ演說要旨報告ノ件

第七号 （二月八日接受）

特使二号

二月四日午後八時總督邸公式晚餐會（總督府商業會議所其他当地ノ有力者ヲ併セ六十余名）席上總督ノ演說要旨左ノ通り

總督ハ一行ニ對スル歡迎ノ辭並ニ昨年日本ニ於テ受ケタル款待ヲ感謝シタル後歐洲ニ於テモ又極東ニ於テモ日仏兩國ノ利害ハ反スルコトナシ日本カ歐洲ニ於テ吾人ヲ援助シ得ルト同シク仏國モ亦極東ニ於テ日本ヲ助力スルコトヲ得ヘシ仏國ヲ代表スル印度支那ハ支那海ト太平洋ニ臨メル亜細亞ノ東端ニ其位置ヲ占ムル關係上仏本國ヨリ与ヘラルヘキ訓令ノ範圍内ニ於テ日仏兩國ノ關係ヲ密接ナラシメ得ヘク特殊ノ地位ニ立テリ印度支那ハ母國ニ對シ特殊ナル親愛ノ念及國家ノ利益ヲ有スルモノナルモ又極東ノ經濟社會ニ其身ヲ置クモノナルニ留意セサルヘカラス印度支那ノ生産物

ハ周圍諸國ノ羨望スル所ナルカ其中ニハ距離ノ遠隔及備給料等ノ關係上歐洲ニ有利ナル市場ヲ見出スコト能ハサルカニアリ

然ルニ印度支那ハ其市場ヲ鎖シ乍ラ自國ノ產物ヲ他國ニ売却シ得ヘシトハ考フルコト能ハス故ニ仏本國及印度支那ノ貿易ニ何等損害ヲ与フルコトナクハ日本ヲシテ現在印度支那總輸入貿易ノ五割ヲ占ムル外國貿易中ニ割リ込マシムルコトヲ得ヘシ然レトモ日本モ亦此ノ問題ニ関シ最後ノ決定權ヲ有スル仏本國カ日本ニ与フル「コンセンション」ニ對シ特殊ノ利益ヲ印度支那ニ与ヘ又一般的利益ヲ仏國ニ与ヘサルヘカラス嘗テ東京ニ於テ開始サレ今日更ニ印度支那ニ於テ行ハルヘキ意見ノ交換ニ依リ全然非公式ノ審議ヲ有望ニ繼續セシメ以テ將來日仏兩國政府ノ執ルヘキ方法及決定ニ到着スヘキ進路ヲ開拓スルヲ得ルニ至ランコトヲ希望スト述ヘタリ

巴里及西貢ヘ転電セリ

一八五 二月十八日

幣原外務大臣ヨリ
在仏國石井大使
「在ハイフォン菅領事」各宛

インドシナ派遣答札使節団内交渉ノ基準トナルベキ方針案等送付ノ件

付属書 対インドシナ答札団派遣ニ関スル関税問題措置方針案

通一機密合第三八号

大正十四年二月十八日

幣原外務大臣

在仏 石井大使

在海防 菅領事 各通

仏領印度支那日仏通商条約加入問題ニ関スル

件

本件ニ関シ客月二十日付通一機密第二号(菅領事ヘハ二十一日付通一機密第一号)ヲ以テ大藏農商務両省ノ修正案ヲ参酌シテ作製シタル本邦重要品ニ対スル関税率軽減要求調査表(仏文)及送付置候処過般同地(菅領事ヘハ「貴地」トス)ヘ答札使節一行出發ニ際シ本問題ニ関シ更ニ右両省關係官ノ協議会ヲ開キ商議ノ結果客年六月十日付通総機密第一二号(菅領事ヘハ同日付通総機密第一号)ヲ以テ及送付候會議事録ヲ原案トシテ本問題措置方針案(甲号)及

(省略) 第一(乙号) 第二修正案(丙号)ヲ作製シ之ヲ以テ該地

(菅領事ヘハ「貴地」トス)ニ於テ適當ノ機会ニ於テ本件内交渉ノ基準トスル筈ニテ当省掛員携行致候右第一修正案ハ前記仏文調査表ト大差無之更ニ些少ノ修正ヲ施シタルモノニ有之候(『』ノ間ノ文句ハ石井大使ノミニテ菅領事ヘハ之ヲ除クコト)『間当方ヨリ何分ノ儀申進スル迄ハ貴方ニ於テノ御交渉ハ之ヲ以テ基礎トセラレ度』此段申進候也

本信送付先 在海防領事(石井大使ヘ)

在仏石井大使(菅領事ヘ)

(付属書)

インドシナヘ答札団派遣ニ関シ関税問題措置方針案

(甲号)

仏領印度支那ヘ答札団派遣ニ関シ関税問題

措置方針案

一、答札団河内滞在中機ヲ見テ曩ニ日本ニ於テ内協定済ミノ原案(松平「キルシエ」案)ニ対スル先方研究ノ結果ヲ問合セ右ニ対スル先方ノ態度ヲ確ムルコト(先方ノ解釈ニヨレハ該原案作成ノ趣旨ハ印度支那関税問題解決

ニ関スル日本側非公式ノ希望ヲ承知セントスルニ在リト言ヒ又其後該原案ハ印度支那官憲ヨリ各地印度支那商業団体ノ諮問ニ付セラレ且在河内經濟評議會ニモ付議セラレタリ)

二、右問合ハセノ結果出来得ヘクハ第一修正案(原案ニ対シ大藏農商務両省並ニ実業家ノ意見ヲ参酌シ修正ヲ加エタルモノ)ヲ参考トシテ結局如何ナル程度迄我ニ於テ讓歩セハ少クトモ印度支那官憲ノ関スル限り協議纏マルヘキヤノ案ヲ持チ帰ルヘク努ムルコト

三、仏領印度支那側最大限讓歩ノ対案ヲ協議ノ上作成スルコトヲ得ル場合ニ於テハ其協議案内容ニ対シテハ本国政府ノ同意ヲ条件トスル留保ノ上協議ヲ進ムヘク又(甲)修正案列記以外ノ物品ニ対スル最惠国待遇付与ニ対スル我方ノ要求(乙)原案付属或種仏領印度支那物品ニ対シ日本側ニ於テ税率軽減ヲ許スルノ形式範圍(前項協議ノ模様ニヨリ本邦産業財政上支障ナキ物品ニ対シテハ更ニ追加スルモ差支ナシ)及(丙)日本ト仏領印度支那間関税協定ニ基ク両国利害ノ相殺ヲ如何ナル程度迄日本及仏本国間交渉ニ参酌スルヤノ三点ニ関シテハ帝国從來ニ

於ケル主張及列国トノ交渉上ノ振合ニ鑑ミ無制限最惠国待遇ノ交換及税率協定ニ関スル相互対等ノ原則ヲ維持スルト同時ニ是等主義ノ問題ハ巴里ニ於ケル仏本国トノ交渉ニ讓ルヘキ趣旨ノ態度ヲ採ルコト

四、前記三所載最終讓歩ノ協議案作成ニ当リテハ帝国通商産業上ノ必要及本邦実業団体ノ意見等ヲ考量スルノ外殊ニ第二修正案ヲ参酌スルコト

一八六 三月二日 在サイゴン古谷領事ヨリ
幣原外務大臣宛

サイゴン及ビカンボディアニ於ケル山県特派使節ノ動靜ニ関スル件

公領第二七号 (三月二十六日接受)

大正十四年三月二日

在西貢

領事 古谷 栄一(印)

外務大臣男爵 幣原 喜重郎殿

西貢及柬埔寨ニ於ケル山県特派使節ノ動靜ニ

関スル件

山県特派使節一行ノ当地方訪問ニ関シ交趾支那知事「コニ

ヤック」氏ハ「メルラン」總督ヨリノ電訓ニ依リ一行歓迎ノ為特ニ接待委員ヲ任命シ西貢市長「ウートロープ」ヲ其委員長トシ歓迎準備ヲ為シ往電第二〇号ヲ以テ不取敢報告ノ通連日熱誠ナル款待ヲ為セルカ之ニ就キテハ使節隨員ヨリ帰国後詳細報告ニ接セラルルコト思考候モ為念一行ノ当地及東蒲塞滞在中ノ動静及当国官憲側ノ歓迎振等ヲ日程ニ依リ略述スレハ

二月十七日 特派使節一行ハ午前十時特別車ニテ「ニヤトラン」ヨリ西貢ニ安着（本官ハ一行滞在中ノ要務打合ヲ兼ね歓迎委員及西貢商業會議所会頭等ト共ニ西貢ヲ距ル三十「キロ」ノ「ビァノア」駅マテ出迎タルカ「ビァノア」省長モ知事ノ代理トシテ出迎ヘタリ）セルカ当日停車場ハ日仏兩國旗ヲ以テ美々シク綺ラレ交趾支那知事、西貢市長、陸軍司令官、海軍指揮官各種行政機關ノ代表者実業家等主ナル当地官民多数出迎ヘ熱誠ナル歓迎振ヲ示シ本官ノ先導ニテ特使ノ下車シ西貢市長及交趾支那政務監督官等ニ迎ヘラレ停車場構内ニ近ツクヤ一列ノ安南兵ハ陸軍敬礼ヲ行ヒ次テ軍樂隊ノ奏スル日仏国歌ノ終ルヲ待チ休憩室ニ入り知事以下主ナル官民ト挨拶ヲ交換シ

次テ市長ノ歓迎ノ辞ヲ述ヘタルニ答ヘ特使ハ知事ト同乗隨員モ各々政庁差廻ノ自動車ニ分乗一先ツ特使ノ宿舍ニ充テラレタル印度支那總督官邸ニ入り特使、佐分利局長、本野翻譯官、陸海軍武官ヲ除キ他ハ別ニ準備セラレタル數ヶ所ノ宿舍ニ分宿セリ

午後三時特使ハ交趾支那知事ト正式訪問ヲ交換シ帰途戦死者記念碑ニ詣テ花環ヲ供進シタリ

午後八時ヨリハ特使及隨員ノ為交趾支那知事官邸ニ於テ知事主催ノ非公式晚餐会アリ又同十時ヨリ本官ハ特使一行ノ為ニ当地随一ノホテル「オテル・コンチナントル」ニ於テ舞踏付「レセプション」ヲ催セルカ「クロードル」大使、交趾支那知事、陸軍司令官等ヲ初メ主ナル日仏官民及其妻女等三百余名ノ来会アリ別紙切抜第二号ノ通十二時過盛會裡ニ散会セリ

二月十八日 午前七時特使一行ハ商業會議所会頭及西貢港灣建設委員長等ノ案内ニテ小蒸汽ニテ西貢商港ヲ視察シ「カナル・ド・デリバシオン」ヲ上リ隣市堤岸^{シロコ}ニ出テ堤岸市長ノ出迎ヲ受ケ其案内ニテ精米所及大酒製造会社等ヲ視察シ西貢ヘ帰還、午後西貢商業會議所ニ於ケル「レ

セツプション」ニ臨ミタリ席上同會議所会頭「ド・ラ・ポムレー」氏ハ別紙切抜第三号記載ノ如キ長大ノ演説ヲ為シ日仏印間ノ經濟的提携ノ必要ヲ力説セルカ之ニ對シ特使及佐分利局長ヨリ一場ノ挨拶アリ「クロードル」大使モ亦一場ノ演説ヲ為シ何レモ聴者ニ深キ感動ヲ与ヘタリ一行ハ此夜更ニ西貢市庁ニ於ケル西貢商業農業兩會議所主催ノ晚餐会ニ臨ミ席上商業會議所会頭ハ別紙切抜第四号ノ通歡迎ノ辞ヲ述ヘ特使ヨリ鄭重ナル答辭アリタリ

二月十九日 特使一行ハ二隊ニ分レ特使ヲ含ム一隊ハ早朝自動車ニテ西貢ヨリ「スザナ・プランタシオン」ニ赴キ護謄、椰子、珈琲等ノ諸園ヲ視察シ同所ニテ園主ヨリ手厚キ午餐ノ饗応ヲ受ケ更ニ夕刻ヨリ「カップ・サン・ジャク」ニ至リ交趾支那知事別邸ニ於ケル知事主催ノ「レセプション」及同所「ホテル」ニ於ケル晚餐会ニ臨ム管ナリシモ特使ハ稍疲勞ノタメ本官及野村医師ト共ニ西貢ニ帰着領事官舎二十一時頃迄打寛閑談セラレ「カップ・サン・ジャク」ノ「レセプション」及宴会ニハ佐分利局長、松島事務官、本野翻譯官等出席シ第二隊ハ同シク早

朝自動車ニテ西貢発「ド・ラ・ポムレー」氏所有ノ「ボンカン」護謄園ヲ視察シ「ボンカン・デレガシオン」ヨリ午餐ノ饗応ヲ受ケ午後「ロクニン」護謄園ヲ視察セリ

二月二十日 午前一行ハ無線電信局ヲ視察シ次テ堤岸市長官邸ニ於テ安南料理ノ饗応ヲ受ケ帰途「バーストール」研究所ノ視察ヲ為シ午後九時ヨリ西貢市長主催ノ觀劇会及舞踏会等ニ臨メリ

二月二十一日 午前六時三十分一行ハ自動車ニテ東蒲塞ニ向ケ出発十一時過「プノンペン」ニ着、東蒲塞高級理事官代理（政務監督官）、「プノンペン」市長、商業會議所会頭等重ナル官民ノ出迎ヲ受ケ市長ハ市民ヲ代表シ歡迎ノ辞ヲ述ヘタリ次テ特使ハ隨員ヲ從ヘ高級理事官ニ高級理事官「ブードアン」氏ヲ正式ニ訪問シ同所ニテ午餐ノ饗応ヲ受ケ午後四時ヨリ商品陳列館及「アルベール・サロー」博物館ヲ參觀シ六時東蒲塞王宮ニ於テ「シソワット」王ノ公式接見アリ終リテ八時ヨリ市庁ニ於ケル商業會議所及市主催ノ晚餐会ニ臨メルカ席上商業會議所会頭ハ主催者側ヲ代表シ別紙切抜六号ノ通歡迎ノ辞ヲ述

へ関税問題ニモ論及スルトコロアリ之ニ対シ特使ヨリモ
一場ノ答辭アリタリ

二月二十二日 午前七時自動車ニテ「アンコール」ニ向ヒ
途中「コンボン・トム」及「シエムレアップ」ニ於テ歓
迎ヲ受ケ午後六時「アンコール・バンガロー」ニ投宿

二月二十三日 「アンコール」遺跡見物

二月二十四日 「プノンペン」ニ向ケ帰途ニ就キ途中「コ
ムボン・トン」ニ立寄り又「ルセ・ケオ」ニ在ル製糸工
場ヲ視察シ午後五時「プノンペン」ニ帰着七時半ヨリ高
級理事官官邸ニ於ケル晩餐会ニ臨席特使及高級理事官ノ
間ニ別紙切抜七号記載ノ如ク「トースト」ノ交換アリ散
会後一行ノ為ニ王宮ニ於テ東蒲塞踊ノ催アリタリ
二月二十五日 正午高級理事官官邸ニ於テ午餐ヲ認メタル
後西貢ニ向ケ出発七時半帰着、特使及隨員数名ハ領事官
舍ニ於テ十二時過迄閑談セラレタリ

二月二十六日 夜交趾支那知事官邸ニ於テ知事主催正式晩
餐会アリ席上知事ハ立ツテ別紙切抜八号ノ通日本ノ近世
ニ於ケル顯著ナル進歩ヲ賞揚シ日仏ハ世界平和ノ為努力
セサルヘカラスト結ヒ之ニ対シ特使ヨリ同切抜ノ通答辭

一八七 三月四日 在仏国石井大使ヨリ
幣原外務大臣宛(電報)

仏国商務、食糧兩省間ノ権限争ニ関シ同国外
務省ニ仲裁役ヲ演ゼシメルコト然ルベキ旨申
進ノ件

第二一〇三号(極秘) (三月五日接受)

往電第二六号及客年往電第五七七号ニ関シ

「セルイス」ハ対独交渉ニ多忙ヲ極メ当方トノ交渉ニ身ヲ
入ルル暇ナキハ事実ナルモ最近同氏ハ議會控室ニ於テ印度
支那カ日本ト協議スルハ許ス能ハサル処ナリト述ヘタルヤ
ノ噂アリ他方「キルシェー」(四日当地発帰任)カ「ロー
ラン」ニ語ル処ヨリ察スルモ印度支那カ日本ト单独交渉セ
ルノ点ニツキ「セ」カ不快ヲ感シ居ルハ略々明ニシテ商務
食糧省間ニ印度支那加入問題ニ関シ意志ノ疏通ヲ欠キ居ル
カ如シ斯ノ如ク關係兩省ニ於テ権限争ヲ為シ居ル状況ノ下
ニ於テ当方ノ交渉ヲ「セ」ニ迫ルモ到底埒明カサルヘキ処
幸ヒ「クロードル」、「メルラン」相次キ近ク帰国スヘキニ
付彼等ノ斡旋ニ依リ外務省ニ仲裁ノ役割ヲ演ゼシメ先ツ兩
省間ノ關係ヲ融和セシメタル後協議ヲ進ムルコト然ルヘシ

七 日仏通商航海条約改定交渉 一八七 一八八

アリタリ

二月二十七日 特使ハ当地官民ノ熱誠ナル歓迎ニ対シ感謝
ノ意ヲ表スル為主ナル官民百五十余名ヲ午後八時ヨリ
「オテル・コンチナントル」ニ招待シ晩餐会ヲ催サレタ
ルカ別紙切抜九号ノ通当地稀ニ見ル盛会ニテ席上特使ハ
一行印度支那滞在中受ケタル款待ニ対シ感謝ノ意ヲ披瀝
シ「メルラン」総督及特使ノ旅行カ日印ノ關係ニ新時代
ヲ画センコトヲ希望スト述ヘ之ニ対シ知事ヨリ一場ノ挨
拶アリタリ

二月二十八日 午前七時一行ハ知事市長等主ナル官民ノ見
送ヲ受ケ「コムピエーヌ」号ニテ香港向出発セリ

右不取敢之ニ関スル新聞記事切抜(一種他ハ大同小異ニ付
省略)添付及報告候 敬具

追テ河内迄同行セル印度支那協會員ハ同地ニテ特使一行
ト別レ其大部分二月二十日「トーラン」ヨリ海路当地ニ
來着、東蒲塞地方モ見物ノ上特使一行ト同船帰朝ノ途ニ
就ケリ此段為念申添候也

写送付先 石井駐仏大使

ト存ス右御含迄

猶最惠国待遇問題ニ就キ往電第一〇〇号所報ノ通り仏ハ独
ニ対シ事実上之ヲ許与シタルカ如キ結果トナリ当方トノ交
渉ニモ好都合トナレリ

一八八 三月六日 在仏国石井大使ヨリ
幣原外務大臣宛

最惠国待遇問題ニ関スル仏国ノ態度緩和ニツ

キ報告ノ件

公第一九〇号

大正十四年三月六日

在仏

特命全權大使子爵 石井 菊次郎(印)

外務大臣男爵 幣原 喜重郎殿

最惠国待遇問題ニ関スル仏国態度緩和方報告

ノ件

所謂最惠国待遇問題ニ関シ仏国カ從來ノ強硬ナル態度ヲ幾
分緩和シ來レルハ公第一七六号所報ノ仏独間ニ成立セル了
解ニ徴シ察知シ得ラレ又本月四日当地ニ於テ署名セラレタ
ル仏葡通商暫定取極ノ公表文ハ更ニ之ヲ裏書セル觀アル処

商務大臣カ五日商工諮問委員会(客年公第五〇二号)ニ於テ為シタル演説中右ノ点ニ関シ明確ニ從來ノ態度カ仏国ノ商工業ヲ發達セシムル所以ニ非ストシ關稅差別ヲ行ハサル国ニ對シテハ広キ範圍ニ於テ最低稅率ヲ許スルコト然ルヘク又仏国力協定稅率ヲ得ルカ為ニハ主義上最低稅率ヲ許スルヲ得ストノ抗弁ヲ為スヘカラスト述ヘタル趣ニテ右ハ仏国工業力ノ恢復發達ノ当然ノ帰結ナルヘキモ兎モ角當通商政策ノ一轉化ヲ示スモノトシテ注目ノ価値アル聲明ト存シ候委曲ハ別添新聞記事ニ依リ御了悉相成度此段及報告候

敬具

一八九 三月二十日 在ハイフオン營領事ヨリ
幣原外務大臣宛

ハノイ商業會議所グラヴィツ会頭帰仏ニ關スル件

通送第三二号 (四月九日接受)

大正十四年三月二十日

在海防

領事 菅 和三郎(印)

外務大臣男爵 幣原 喜重郎殿

河内商業會議所会頭帰仏ニ關スル件

河内商業會議所会頭 Grawitz 氏ハ三月十九日「エム・エム」汽船「フォンテンブロー」号ニテ当地出發帰仏ノ途ニ就ケルカ右ハ本国ニ居住センカ為メニシテ今後當領ヘハ關係事業視察ノ目的ニテ時々往復スルニ過キサル由ナリ尤モ同氏今般ノ帰仏ハ河内商業會議所並河内見本市展覽會ノ用務ヲ帶ヒタル關係上來ル五月一日以降最大限六箇月ヲ限り會議所会頭ノ名儀ヲ保持スル筈ナリ出發前同氏カ本官ニ内話シタル処ニ依レハ同氏ハ帰仏後「クローデル」大使ヲ通シ仏国政府ニ對シ印度支那總督ノ更迭如何ニ關ハラス當領ニ關スル日仏交渉ノ進捗ヲ計ランコトヲ促シ出來得レハ來年九月頃巴里ニ於テ開カルヘキ日仏兩國間ノ討議ニ仏國側委員トシテ参加シタキ意向ナルト共ニ Adler 氏ノ率ユル今回ノ仏國經濟視察團ノ訪日ヲ機會トシ本邦復興材料買入ニ預ラント努ムル仏國鐵工業者団体カ從來印度支那仏國商人ト見解ヲ同ウセル仏國綿業者団体ヲ圧迫シ印度支那關稅問題ニ關シ日本ニ一層有利ナル讓歩ヲナサシメント試ムル虞アルヲ以テ右仏國ニ大業者団体ニ介在シ當領商人ノ正当利益擁護ニ努ムル趣ナリ

ツキ意見交換ノ件

第八七号(極秘)

(一)仏領印度支那ヘ派遣セラレタル山県特使一行ハ二月三日海防着、各地ニ於テ官民ノ最モ熱誠ナル歡迎ヲ受ケ二月二十八日西貢発三月二十日帰朝シタルカ今回彼我ノ間ニ行ハレタル交驩ハ日仏兩國ノ親善殊ニ我國ト印度支那トノ間ノ善良ナル諒解ニ資スル所鮮ナカラスト思考ス

(二)關稅問題ニ關シテハ往電第八号ノ通り我ニ於テハ受動的態度ヲ持シ單ニ意見交換ノ機會生シタル際之ニ応シ得ル様準備シ居リタル次第ナル処一行彼地着後「クローデル」大使「メルラン」總督ノ尽力ニ依リテ諸般ノ情況有利ニ推移シ諸商業會議所幹部モ大体ニ於テ予想外ニ好意的ナリシノミナラス總督ヨリ關稅局長代理「ボレル」ト會談セラレタキ旨ノ申出アリタルヲ以テ河内滯在中通商局長ハ「ボレル」ト五回ノ協議會ヲ開キ河内、海防兩商業會議所会頭及副会頭モ隨時之ニ参加シ昨年東京ニテ作成セル品目表ニ付一々意見ノ交換ヲ行ヒタリ後一行ノ西貢ニ向フヤ總督ハ「ボレル」ヲ同地ニ派遣シ同地ニ於テ更ニ西貢商業會議所及農業會議所ノ各会頭及副会頭ヲ加

案スルニ從來ノ先例ヲ破リテ河内商業會議所カ同氏ノ帰仏ト同時ニ会頭ノ選舉ヲ行フコトナク相當議論アリタルニ拘ハラスト同氏ノ会頭名儀保持ヲ承認シタルハ前記内話後段ノ件ニ基ク処アルナルヘシ
尚同氏出發後ハ現副会頭 Perraud 氏会頭代理ヲ勤メ Grawitz 氏ノ任務終了後ハ正式会頭トナル筈ナリ最近同副会頭カ本官ニ語ル処ニ依レハ對日關稅問題ニ關スル總督ノ諮問ニ對シ河内、海防兩商業會議所ノ答申案ハ既ニ完成セルモ西貢ノ答申案ノ内容ヲ承知セサルヲ以テ同地通過ノ会頭ヲ通スルカ又ハ直接照會スルコトニ依リテ西貢ノ意見ヲ聞キ可成ハ三商業會議所ノ態度ヲ一ニシテ答申スル意向ニテ右ハ結局「キルシェー」稅務長官四月初旬帰任後ノコトトナル趣ナリ
右及御報告候 敬具
本信写送付先
在 仏石井大使

一九〇 三月三十一日 幣原外務大臣ヨリ
在 仏国石井大使宛(電報)

答札使派遣ニ際シインドシナ側ト關稅問題ニ

七 日仏通商航海条約改定交渉 一九〇

ヘテ五回ノ協議会ヲ開キ河内ニ於ケルト同シク各品目ニ付意見ノ交換ヲ了シ其ノ結果ヲ総合シテ一ツノ議事録ヲ作成セリ写郵送ス

(三) 議事録本文記載ノ要項左ノ通

(イ) 商議ハ昨年東京ニ於テ行ハレタル非公式商議ノ継続ニシテ両国政府ヲ拘束セサルコト

(ロ) 仏本国カ印度支那ニ供給スル物品ニ付テハ印度支那ニ於テ商議ヲ為スモ実益ナカルヘキコトニ意見一致セリ
(註、印度支那カ擅ニ本国ノ利益ヲ害ストノ非難ヲ排除スル為ナリ)

(ハ) 印度支那ニテ生産スル物品ニ付テハ各商業會議所ヨリ地方産業ノ發達ニ必要ナル保護ノ程度ヲ申出ツヘキコト(註、各商業會議所ハ本件ニ關スル総督ノ諮問ニ對シ末タ回答シ居ラサル実情ヲ考慮セルモノナリ)

(ニ) 前記(ロ)以外ノ物品ニ付テハ日本ノ希望ハ印度支那側ニ於テ十分妥協的ニ考查シタル上最モ好意的ナル意見ヲ付シテ仏本国政府ニ移牒スヘキコト

(四) 前記ノ事項留保ノ下ニ双方ハ東京ニ於テ提出セラレタル日本ノ要求カ付屬書ノ通り改メラルルニ於テハ本件

ニ關シ将来仏本国ニ於テ行ハルヘキ正式ノ交渉ヲ容易ナラシムヘシトノ結論ニ到達セルコト

(四) 議事録付屬ノ品目及税率表ノ要領左ノ如シ

(イ) 綿布ニ付テハ仏本国ヨリ供給スル物品即チ(三)ノ(ロ)ニ該當スルモノトシテ今回ハ意見ノ交換ヲナサス全然巴里ニ於ケル商議ニ譲レリ

(ロ) 綿糸ニ付テハ各種ニ亘リ最初ノ四品即チ大一、〇〇〇米突以下ノモノハ現行印度支那ニ於ケル Tariff Special Général ヨリ一五%引右以上ノモノニ對シテハ Tariff Minimum ニ五〇%増

(ハ) 絹織物ニ付テハ仏本国ノ供給セサルモノハ支那産絹物ニ適用セラルル特別税率、仏本国ノ供給スルモノハ極東以外ニ原産スル絹物ニ適用セラルル最低税率

(ニ) 右三品以外ノ物品ニ關シ商議ノ結果ヲ略言スレハ大体左ノ如シ即チ現ニ印度支那ニ於テ本国ノ Tariff General (Tariff Minimum ノ四倍)ヲ適用スルモノニ付テハ一九二一年三月前ノ Tariff Général (大体ニ於テ最低税率ノ五割増)トセルモノト Tariff Minimum トセルモノトニ定メタリ

本国ノ一九二一年三月前ノ Tariff Général 又ハ一九一〇年三月前ノ Tariff Général (大体ニ於テ Tariff Minimum ニ其ノ三〇%ヲ加ヘタルモノ)ヲ適用セルモノニ付テハ之ヨリ其ノ一五%引トセルモノト Tariff Minimum トセルモノトニ定メタリ
支那品ニ對スル特別税率ハ成ルヘク広キニ亘リ本邦品ニ適用ス
詳細郵報ス

一九一 四月五日 幣原外務大臣ヨリ
在仏国石井大使宛(電報)

インドシナノ日仏通商条約加入問題ニ關スル
アデル仏国実業視察團長ノ談話ニツキ参考
トナルベキ情報電報方訓令ノ件

付記 四月三日インドシナ問題等ニ關スルアデル仏
国実業視察團長ノ佐分利通商局長ヘノ内話要領

第一〇一号(極秘)

仏国実業團四月一日着同三日團長「アデル」内談シタキ趣ヲ以テ通商局長ト会見ノ際同氏ハ今回ノ実業團ト日仏通商条約殊ニ印度支那ノ条約加入問題トノ間ニ密接ノ關係ア

ルカ如キ口吻ヲ洩シ同團ノ帰国前ニハ巴里ニ於ケル条約ノ談判モ進捗スルコト無カルヘシトノ意向ヲ述ヘ且印支ノ条約加入ニ關スル諸問題中最モ機微ノ性質ヲ有スルハ綿布ニ關スルモノナルカ今回ノ実業團中ニハ製鉄業者ノ代表者アリ若シ日本カ仏国ヨリ製鉄ヲ輸入スルコトナレハ仏本国ニ於テ製鉄業者ハ綿布業者ヨリモ勢力強大ナルヲ以テ綿布業者ノ反對ヲ抑制スルニ力アルヘキ旨付言セリ「ア」氏ハ西貢ニ於テモ局長ニ對シ同趣旨ノ談話ヲ為シ実業團來訪ト条約問題トヲ結ヒ付ケムト試ムルノ傾アリ

然ル処當方ニ於テ右「ア」氏ノ言ニ何程重キヲ置キ然ルヘキヤ明カナラサルニ付今回「ミッシン」ヲ送レル仏国政府ノ意向殊ニ条約問題トノ關係及「ア」氏ト製鉄業者トノ關係等ニ付當方ノ参考トナルヘキ情報アラハ御電報アリタシ

(付記)

四月三日インドシナ問題等ニ關スルアデル仏国実業視察團長ノ佐分利通商局長ヘノ内話要領

四月三日(祭日)午前九時仏国実業視察團長「アデル」氏佐分利通商局長ヲ外務省ニ來訪同氏内話ノ要領左ノ如シ

一、今回日本来訪ニ際シ「メルラン」総督ヨリ日本特使一行ノ滞在中印度支那ニ立寄ラムコトヲ懇望セルヲ以テ特ニ旅程ヲ早メ印度支那ニ赴キタル処右ハ多少本国ノ日印支条約關係設定ニ反対スル分子ノ感情ヲ刺激スル所アリタリ仍テ自分ハ印度支那滞在中勉メテ控目ノ態度ヲ持シ居リタリ

本国ニ於テ「ホームベール」ノ起シタル反対運動ハ一時熾烈ナリシモ其ノ後多少下火トナリシ傾アリ要スルニ本国ニ於ケル反对者ハ綿布製造業者ニシテ綿布ノ問題ハ極メテ機微ノ性質ヲ有スト思考ス仏本国ニ於ケル本問題ノ解決ハ何レノ途実業團一行帰仏ノ後即チ六月ノ頃ニ非レハ解決ノ運ヒトハナラサルヘク從テ一行ノ成功ト否トハ印度支那問題ノ解決ニ影響アル次第ナリ例ヘハ一行中ニ製鉄業者ノ代表者アリ若シ仏国カ日本ニ製鉄ヲ輸入シ得ルニ至レハ元來製鉄業者ノ勢力ハ綿布業者ノ勢力ニ比シ強大ナルヲ以テ前者ハ印支問題ニ関スル後者ノ反对ヲ抑圧シ得ル次第ナリ

二、今回右実業團一行ノ重要視シ居ル事項ハ右製鉄売込ミノ外

サルカ「アデール」ノ意向ハ鉄製品ニ就キ有利ナル協定税率ヲ得ルノ瀬踏ミヲ為サントスルニ非サト思考ス

一九三 四月七日 幣原外務大臣ヨリ
在仏国石井大使宛（電報）

インドシナノ日仏条約加入問題ニツキ交渉開始シタキ意向通知ノ件

第一〇六号（極秘）
往電第八七号ニ関シ

河内、海防、西貢ノ各商業會議所及農業會議所ハ今般我方ト作成シタル議事録ヲ基トシ近ク「メルラン」総督ニ対シ各會議所共同ノ報告書ヲ作成提出スヘク仏本国ニ於ケル反对者「ホームベール」一派ヲ除キ之ニテ印度支那側ノ意見ハ大体纏マルヘキ次第ナルカ今次ノ我特派派遣ノ結果我ト印度支那間ニ齟齬ラサレタル友好ノ情尚温カキ間ニ於テ条約加入問題ノ交渉ニ入ルコト得策ナルヘキヤニ考ヘラルルニ付場合ニ依リテハ日仏間ノ条約改定問題トハ全然離レ近ク之カ交渉ヲ開始シタキ意向ナリ御参考マテ

一九四 四月九日 在仏国石井大使ヨリ
幣原外務大臣宛（電報）

七 日仏通商航海条約改定交渉 一九三 一九四

(イ)大規模ノ電力施設、例ヘハ鉄道ノ電化及水力発電ノ如シ

(ロ)機械類ノ売込殊ニ紡績機

(ハ)無線電信設備

ナリ

三、右商取引ニ関スルモノノ外宣伝事業ニ付テモ攻究ヲ遂ケタク諸外国カ此点ニ付多大ノ注意ヲ払ヒ居ル際日仏兩國ノ通信交換問題ハ放任セラレ居ルタメ頗ル不満足ノ状態ニアリ之カ改善ヲ急務ト認ム

一九二 四月六日 在仏国石井大使ヨリ
幣原外務大臣宛（電報）

石井大使、アデール仏国実業視察團長トノ会

談ノ模様報告ノ件

第一五一号（極秘） （四月七日接受）

貴電第一〇一号ニ関シ

「アデール」出發前本使ハ數次彼ト面会セルモ同氏ノ一行カ仏国ノ事情照会及日本ノ經濟狀況視察以外ニ条約締結問題ト直接関連セル使命ヲ有ストノ事實ハ承知セス當方ニ於テハ今尚仏ニ対シ協定税率ヲ与フルコトアルヘキヲ明言セ

日仏通商交渉問題ニ関スルクロードル大使トノ会談要領報告ノ件

第一五五号（極秘） （四月十日接受）

嚮ニ帰朝セル在日本仏国大使ハ首相トノ会見後ニアラサレハ本使ヲ訪問シ能ハサル關係上八日初メテ来訪セリ之ヨリ先キ本使ハ名誉領事ヲ經テ「クロウデル」カ山県答礼使一行ノ印度支那訪問ノ結果印度支那ノ日仏条約加入問題ニ関スル同領ノ輿論著シク改善セラレ本件ニ対スル從來ノ故障除去セラレタルニ付此ノ機ヲ逸セス日仏通商談判ヲ進ムルコト然ル可シトノ意見ヲ政府ニ提出シタル趣ヲ承知セルカ「ク」氏ハ本使来訪ノ節右ノ趣ヲ語リタル上最近同氏カ大統領ニ面謁セル際大統領ハ印度支那問題ニ言及シ通商關係上日本ヲ独逸ト同様ノ地位ニ置クノ不当ナル旨及支那ニ於テ金法問題ニ対スル日本ノ援助ハ仏国政府ノ大ニ感謝シ居ル処ニシテ關係銀行家モ之ヲ德トシ居ルニ付之ニ報フル意味ニ於テモ印度支那ニ関スル日本ノ要求ニ好意的考料ヲ加フルヲ要スル旨ヲ述ヘ右ハ大統領ノ言トシテ植民大臣ニ伝ヘヨト言ヘル由ヲ付言セリ仏国大使所言ノ通日仏交渉ヲ進捗スル時機ニ到達シ居ルモノト存スルニ付仏国目下ノ政界

ノ危機カ孰レニカ落チ着クヲ待チテ交渉ヲ開始シタキ所存ナリ

尚右来訪ノ機ニ於テ貴電第八六号ノ趣旨ヲ伝ヘタルニ「ク」氏ハ貴大臣ノ好意ニ対スル感謝ノ念ヲ伝達方依頼セリ

一九五 四月十一日 幣原外務大臣ヨリ
在ハイフオン菅領事宛(電報)

特派派遣ニヨル彼我交渉ノ結果作成サレタル

議事録ニ対スル各商業会議所側ノ取扱回電方

要望ノ件

第一七号(極秘)

印度支那関税問題ニ関シ客年五月東京ニ於テ彼我非公式商議ヲ為シタル次第アリ其ノ結果ニ付印度支那総督ヨリ曩ニ各商業会議所ノ意見ヲ徴シタルニ対シ各商業会議所側ニ於テハ未タ上申シ居ラサル趣ナリシ処特使ノ河内及西貢滞在中兩地ニ於テ各五回関税問題ニ関シ彼我ノ間ニ商議ヲ開キ二月二十七日西貢ニ於テ右商議ノ結果ヲ摘録セル議事録ニ通ヲ作成シ(其ノ写及商議経過説明書郵送ス)タルカ西貢商業会議所会頭ハ右総督ノ諮問ニ対シテハ各地商業会議所側ニ於テ右議事録ニ基キ共同ノ意見ヲ作成シテ答申スルコ

(?)「キルシェイ」局長往訪各談話要領左ノ通り

一、「ボウレル」 「メルラン」 総督へ復命後各商業会議所ハ議事録写ノ請求アリタルモ「キルシェイ」局長ノ帰任(四月八日)ヲ待ツヲ適當ト考ヘ之ヲ差控ヘタリ

二、「ペルウ」 商業会議所トシテハ総督府ノ諮問ニ対シ可成同一ノ態度ニ出テ度キ意向ニシテ交渉ニ努メタルモ西貢ハ依然本國品関係税率ハ本國ノ決定ニ一任スヘシトノ説ヲ持シ実現困難ナルニ付近日議事録入手ノ上海防ト協議シ本國品関係税率ヲモ含ム成案ヲ答申スル予定ナリ答申ノ具体的内容ハ総督府ニ対スル参考意見ナレハ語ルヲ避ケタキモ一九二一年一般税率ヲ日本品ニ適用スルハ如何ニモ不當ナリ本國並當領産業ノ保護ヲ充分考慮シテ公平ナル中間税率ヲ設定スヘキナリ

三、「キルシェイ」 帰任早々多忙ヲ極メ書類考究ノ暇ナキ次第ナレハ改メテ会谈ノ機ヲ得タシ

一九八 四月二十七日 在ハイフオン菅領事ヨリ
幣原外務大臣宛

関税協定問題ニ関スルハイフオン商業会議所

ボルシェ会頭談話要領報告ノ件

七 日仏通商航海条約改定交渉 一九八

トスルノ所存ナル旨内話シ居リタリ

然ル処各商業会議所ハ右議事録ニ対シ其ノ後如何ナル取扱ヲ為シタルヤ又今後如何ニ取扱フ所存ナルヤ前記「ボレル」関税局長代理及貴地商業会議所会頭尚場合ニ依リテハ河内ニ赴キ商業会議所会頭等トモ御会谈ノ上結果回電アリタシ

一九六 四月十六日 在ハイフオン菅領事ヨリ
幣原外務大臣宛(電報)

メルラン総督帰國ノ旨報告ノ件

第一九号

「メルラン」総督十五日出發帰任ノ途ニ就ケリ

一九七 四月十六日 在ハイフオン菅領事ヨリ
幣原外務大臣宛(電報)

ボウレル関税局長代理、ハノイ商業会議所会

頭代理及ピキルシェ関税局長トノ談話要領報

告ノ件

第二〇号(極秘) (四月十七日接受)

貴電第一七号ニ関シ

「ボウレル」氏「ペルウ」河内商業会議所会頭代理トシテ

通送機密第七号

大正十四年四月二十七日

在海防

領事 菅 和三郎(印)

外務大臣男爵 幣原 喜重郎殿

関税協定問題ニ関シ海防商業会議所会頭談話

要領報告ノ件

四月二十五日海防商業会議所会頭「ポルシェ」(Porchet)氏一時帰任ノ為暇乞旁本官ヲ来訪シ関税問題ニ関シ左ノ通内話セリ

昨二十四日河内ニ赴キ河内商業会議所会頭代理「ペル」氏ト共ニ約ニヨリ「キルシェ」関税局長ヲ往訪シタル処病氣引籠中ニテ面語ノ機ヲ得サリキ從テ例ノ議事録入手ハ元ヨリ本件ニ関スル意見交換ヲ為スコト不可能ナリシヲ以テ河内、海防両會議所ハ総督府ノ諮問ニ対スル答申提出ヲ尚ホ暫ク見合スノ外無キ次第ナリ但シ商業会議所ノ意見ハ既ニ確定シ居レリ

日本ノ最も重要視スル綿糸、綿布ニ就テ言ヘハ最低税率ノ一倍半ヲ標準トスル現行印度支那一般税率ノ適用ハ之ヲ現

状維持トナシタキ意向ニシテ尤モ綿糸ニ就キテハ印度支那一般税率ニシテ本国一般税率ト異ナルハ税率表中各項最初ノ四品ニ限り(一基ニ付六百米以下ノモノ)居ルモ他ノ品ハ實際上需要ナク本国一般税率ヲ施行スルコト絶対ニ無之其儘トスルモ何等日本品ニ対シ禁止の税率ヲ実施スルコトハナラサルヘシ日本ノ主張カ英米トノ衡平待遇ニ在ルコトハ克ク了解シ居ル処ニシテ当方ノ考ヘニテハ本国一般税率ト異ナル現行印度支那一般税率ヲ基礎トシテ按配スレハ米國品トノ差別待遇ハ之ヲ除キ得ル見込ナリ

帰仏後特ニ余ノ力ヲ注キタキハ日本及当領ニ於ケル日仏間ノ予備交渉ニ対スル本国側ノ疑惑誤解ヲ消滅セシムルコトナリ、当方トシテハ日本ノ主張ヲ予メ知り之ニ対スル實際的研究ヲナシタキ意向ヲ有シタルノミニテ何等他意アルニ非ス然ルニ本国側ニテハコノ点ヲ充分理解シ居ラサルモノ如シ云々

右及御報告候 敬具

一九九 五月一日 在仏國石井大使ヨリ
幣原外務大臣宛(電報)

日仏交渉再開ノ際ノ交渉方針請訓並ビニ日本・

改訂問題協議ノ際先方ヨリ所謂代償ノ意味ニテ要求ヲ為シ来レル場合我方ヨリ逆ニ其ノ代償トシテ印度支那關稅率ノ引下ケヲ彼ニ迫リ得ルノ余地アルヘシ且又仏ハ当分外國公債ニ応スルノ能力ナク然モ製鐵能力ハ既ニ國內需要ニ二倍シ其ノ販路ヲ保障スル為伊ニ対シ製鐵ノ最低輸入數量ノ協定ヲ求メムトストノ報道アリ旁我方トシテハ彼ニ対スル引目皆無ナリト認メラルル狀況ナルニ付篤ト御考量ノ上交渉方針御訓示ヲ請フ

日印協定ト日仏改訂トヲ関連セシメントスル仏ノ主張ヲ排除シ貴電第一〇六号ニ依リ前者ヲ離シテ進行セシメントスルニ当リ左記ノ点予メ承知致シタシ

(一)客年来当方ニ於テハ仏國各方面ニ対スル説明中東京ニ於ケル非公式會合ノ際我方ヨリ提示セル讓歩ヲ最小限度トシ依然最惠國待遇主義ヲ主張シ来レルカ今後商議再開ノ曉ニハ直ニ貴電第八七号ノ協定案ヲ基礎トセラルヘキヤ
(二)右協定案ノ詳報ニハ接セサルモ電報ヨリ判斷スルニ我方從來ノ方針タル最惠國待遇主義ハ全然御拋棄相成其ノ上ニモ重大ナル讓歩ヲ為サレタルヤニ見受ケラルル処印度支那產物ニ対スル我輸入協定率ノ許与ハ留保セラレアリ

インドシナ協定ニ関シ承知シタキ点問合セノ件

第一八四号(秘) (五月二日接受)

往電第一五五号ニ関シ四月二十五日「ブリアン」ニ商議続行方ヲ申入レ二十八日商務大臣ヲ往訪「セルイス」ト会谈セルカ仏独交渉ハ五月二十五日仏議會会再開迄ニハ成否何レニカ決シ一段落ヲ告クル意向ナレハ夫レ迄待タレタシト述ヘタルニ付本使ハ第一回商議開始後六ヶ月ヲ經過シ充分再開ノ時機ニ達シ居レリト信スルニ付此ノ際日印關稅協議丈ケナリト開始シテハ如何ト謂ヘルニ大臣ハ植民省カ銓衡シ得ル問題ニ入ラストテ暗ニ商務省カ重大ナル發言權ヲ有スルコトヲ仄カシ「セ」ハ更ニ日印協定成立ノ代償トシテハ若干ノ本國品ニ付協定税率ヲ得タキ口吻ヲ漏シタリ要スルニ日印協定ヲ本條約改正問題ト切離シ單獨成立セシムルハ極メテ困難ト觀測セラルルモ仏独談判ノ一段落付キタル上ハ貴電第一〇六号ニ從ヒ第一段ニ於テ日印協定談判ニ入ルコトヲ主張スヘキヤ或ハ其ノ辺ハ一切当方ノ都合ニ御一任アルヘキヤ惟フニ印度支那關稅問題ハ第一段ニ於テ確定セシメス先ツ主義上協議ヲ纏ムル止メ置ク時ハ日仏

ヤ

(三)更ニ仏國側ノ重要視シ居ル綿布ニ付テハ当地ノ協議ニ讓ラレタル処当方トシテハ從來ノ關係上最低税率ニ二割増ヲ以テ切出スノ外無カルヘキモ今回ノ協定案ノ振合ヨリ見テ右ハ到底先方ノ同意ヲ得ル見込無シト存ス彼ニシテ相当税率ノ許与ヲ承諾セサルトキ我方ノ執ルヘキ態度御内示アリタク或ハ仏本國產品ニ対スル協定税率協議ノ際ノ我方武器トシテ留保スルモ一策カト存ス

二〇〇 五月十五日 在ハイフオン普領事ヨリ
幣原外務大臣宛(電報)

インドシナ總督ノ諮問ニ關スル其後ノ成行キ
ニツキキルシェ局長ノ内話回報ノ件

第二一号(極秘) (五月十六日接受)

往電第二〇号ニ關シ
十三日「キルシェイ」局長往訪其後ノ成行ヲ尋ネタルニ關稅局ハ目下植民地監察官ノ檢閱及臨時諮問會議ノ提案準備ニ多忙ヲ極メ居ルモ近ク商業會議所ヘ議事録寫ヲ交付シ其答申ヲ待チ遅クモ七月初ニハ總督府ノ意見書ヲ植民大臣ヘ提出ノ予定ニシテ十月ニハ日仏間ノ商議巴里ニ開カルヘク

右商議ニハ同人モ参加ノ筈ナリ

二〇一 七月三日 在仏国石井大使ヨリ
幣原外務大臣宛(電報)

近ク日仏交渉再開ノ見込ミニツキ交渉方針等
至急回訓方要請ノ件

第二五二号(極秘) (七月四日接受)

日仏交渉ニ関シ「ブリアン」ハ印支問題ヲ切離シ解決スヘシトノ意向ヲ有シ「セルイス」モ大体之ヲ納得セルヤニ伝ヘラレ仏独交渉ハ依然行惱ミノ様子ニテ過日商務大臣ハ議會休暇迄ニハ成否何レカニ決スヘシト公言セル次第モアリ
旁当方交渉ハ近ク再開セラル可シト存スルニ付テハ往電第一八四号ノ件ニ関シ何分ノ儀至急御訓示ヲ請フ

二〇二 七月四日(着) 在米松平大使ヨリ
幣原外務大臣宛(電報)

石井大使日仏同盟ヲ提唱セル旨ワシントン・

ポスト紙報道ノ件

第二二五号

三日華府「ポスト」ハ其ノ第一面ニ市俄古「トリビューン」ヨリ得タル特電ナリトシテ石井子爵巴里ニ於テ日仏同

第二〇九号(極秘)

貴電第二五二号ニ関シ

一、仏国当局ニ於テ印支協定ヲ日仏改訂ト引離シテ解決セントノ意向ヲ有スルニ至リタルハ好都合ナリ印支問題ハ多年ノ懸案ナルカ我國ニ於テハ今回コソ解決ノ時機ニ到達シタリト一般ニ思考シ居ル実情ナルヲ以テ万一又々本件交渉ノ停頓ヲ見ルカ如キコトアラハ一般国民ノ失望不滿ヲ招致スルハ必然ニ付此際是非共本問題ノ解決ニ努力シ度仏国側ニ於テモ此辺ノ事情ヲ充分諒得セムコトヲ希望スル次第ナリ

日仏条約モ改訂ノ必要ニ迫ラレ居ルカ之ヲ印支問題ノ急速解決ヲ要スル事情ニ比スレハ自ラ緩急ノ差アルヲ以テ先ツ日印問題ヲ急速解決シタク即チ場合ニ依リテハ税率等ニ関スル特別ノ協定ヲ遂ケタル上印支ヲ不取敢現行條約ニ加入セシムルノ形式ニ依リ本問題ヲ一応解決シ其ノ後日仏改訂ニ及フコトトスルモ一策ト思考シ居ル次第ナリ

二、日仏印税率協定ニ付テハ昨年東京ニ於テ我要求案(A表ト称ス)ヲ作成セル際列記以外ノ品目ニハ最低税率ヲ

七 日仏通商航海条約改定交渉 二〇三

盟ヲ提唱スナル大見出ノ下ニ石井大使ハ仏政府ニ日仏軍事同盟並通商同盟締結ノ提議ヲナシ日本ハ其ノ予備の行為トシテ仏国商會ニ鐵道車輛二億三千万法ノ注文及飛行機其ノ他軍需品ノ大注文ヲナシタルカ同盟ノ内容ハ日本ハ新嘉坡ニ對峙セル西貢港ヲ利用シ英艦隊カ支那海ヲ經テ日本ニ對スルヲ阻止スル便宜ヲ得若シ独逸カ仏ヲ攻撃シ露カ独ヲ援助シタル場合ニハ日本ハ露ヲ攻撃スヘク且軍需品ハ仏ヨリ購入スルコトヲ提議シタルモノナリ然ルニ仏政府ハ米國ノ反對並ニ安価日本品及移民ノ印度支那流入ヲ懸念シ本問題ニ関シ余リ利スル処ナキモ右ハ客年「メルラン」東京訪問ノ際既ニ日本側ヨリ提議アリシモノナリト報シ居リ相当各方面ニ注意ヲ惹ケル模様ナルニ依リ当館ニ於テハ不取敢「メルラン」訪日ノ際何等關稅問題ノ外政治的意見ノ交換ナカリシ旨ヲ述ヘ右報道ハ全然誤報ト信スル旨發表ノ手續ヲ取り置ケリ仏ニ電シ英ニ郵送セシム

二〇三 八月一日 幣原外務大臣ヨリ
在仏国石井大使宛(電報)

日仏交渉再開ノ際ノ日本・インドシナ税率協
定等ニ関スル対処方針回訓ノ件

適用スヘシトノ主義ヲ主張シ居リ本年印度支那ニ於ケル協議ノ際ニハ何等之ニ言及シタルコトナク從テ最低税率適用ノ主義ハ維持セラレ居ル次第ナリ
仏国側ニ於テ右ノ主義ヲ認ムルコトニハ容易ニ同意セサルヘキモ我方ハ此主義ニ依リテ交渉シ出来得ル限り之カ貫徹ニ努力スルノ要アリ

三、万一前項ノ趣旨ヲ實現シ得サル場合ニハ相互の利益交換ノ主義ニ依リ一方印度支那輸入税ニ付テハ中間税率ヲ適用スヘキ品目表ト最低税率又ハ最惠國待遇ヲ受クヘキ品目表トノ二ツヲ作成シ又他方日本輸入税ニ付テハ協定税率ヲ与フヘキ品目表ト最惠國待遇ヲ与フヘキ品目表トノ二ツヲ作成シ爾余ノ物品ニ付テハ互ニ條約上ノ保障ナキコトトスルノ外ナカルヘク且品目列記ニヨル不便ヲ緩和スル為別ニ「日本ト印度支那トノ通商關係ノ円満ナル發展ヲ期スル為日仏兩國ハ列記以外ノ品目ニ適用スヘキ税率ニ付必要ニ応シ隨時協議スヘシ」トノ趣旨ノ一項ヲ挿入シ置クヲ適當トスヘシ尤モ本項ノ方法ハ万已ムヲ得サル場合ニ限り之ニ依ルモノニシテ其ノ際ニハ先方ニ對シ最惠國待遇主義ヲ捨ツルハ印度支那特殊ノ事情ニ基ク

特例ニシテ仏本国トノ關係ニ影響セシメサルヘキコトヲ明カニシ置クノ要アルヘシ

四、今回印度支那ニ於ケル協議ハ昨年作成シタル我方ノ要求ニ対スル先方ノ意向ヲ知ルコトヲ目的トシタルモノナリ會議録付属表(B表ト称ス)ニ「日本政府ノ要求」トアルハA表中ノ文字ヲ其儘存シ居ルモノニシテ今回ノ協議ニ於テ新ニ我方力之ヲ要求シタル趣旨ニアラス會議録中ニモ記載シアル如クA表ヲB表ノ如ク修正スルニ於テハ巴里ニ於テ行ハルヘキ交渉ヲ容易ナラシムヘシトノ趣旨ニ出テタルニ過キス印度支那ニ於ケル協議ニ於テハ我方トシテハ印支側ヲシテ条約關係ヲ結フノ決心ヲ固メシムルヲ目的トシ而シテ協議ハ短時日間ニ行ハレ會議録モ頗ル不完全ナルヲ以テ必スシモ之ヲ貴地交渉ノ基礎トシテ仏国側ニ提出スルノ必要ナク況ンヤ商務省側ニ於テハ印度支那カ日本ト直接交渉セルヲ喜ハサルカ如キ事情アラハ猶更始メヨリ之ヲ持出スノ得失ハ考慮ノ要アルヘシ要スルニA、B両案共政府ヲ拘束シ居ルモノニアラス單ニ日本側及印支側ノ大体ノ意向ヲ知ルノ資料タルヘキモノナルヲ以テ貴地商議ノ際AB両案ハ同時ニ参考ニ供セ

ラス尤モ一般的ニ云ヘハ本品ハ先方ニ於テ最モ重要視シ容易ニ大ナル讓歩ヲ為ササルヘク又我方トシテモ本品ニ關スル先方ノ讓歩ハ最モ実益ヲ伴フモノニシテ之ニ關スル機微ナル交渉ハ一二閣下ノ御努力ニ俟ツ次第ナリ

二〇四 八月七日 在仏国石井大使ヨリ
幣原外務大臣宛(電報)

仏国外務省ヨリ日仏条約ト切離シ日本・イン
ドシナ問題協議方受諾ノ旨申越シノ件

第二九四号(極秘) (八月八日接受)

往電第一八四号冒頭ニ関シ

日仏改訂ト切離シ日印問題ヲ先ツ討議シタシトノ当方ノ申出ヲ容レ来ル十二日外務省ニ於テ本問題ヲ協議シタキ旨五日付書面ヲ以テ外相ヨリ申越セルニ付承諾シ置ケリ

二〇五 八月十四日 在仏国石井大使ヨリ
幣原外務大臣宛(電報)

日仏交渉ノ開始及ビインドシナ關稅問題討議
ノ模様報告ノ件

付記 十月五日在仏国石井大使宛幣原外務大臣宛機密

公第一二三号

七 日仏通商航海条約改定交渉 二〇四 二〇五

ラルヘキモノナリ右ABヲ原案トスヘキヤ又ハ他ノ別案ヲ原案トシテ交渉ヲ始ムヘキヤニ付テハ仏国側ノ意向ヲモ御参照ノ上御意見アラハ御申出アリタシ

各品目ニ対スル我最終讓歩案ハ追テ關係省トノ協議纏マリタル上ニテ申進スヘシ

五、日印間ニ条約關係ヲ設定スルコトハ延テ日本ト仏本国及印支トノ一般經濟關係ヲ増進スルノ効果ヲ生スヘク隨テ單ニ輸入税ノ關係ノミヲ以テ相互ノ利益ヲ比較計量スヘキモノニアラサルモ仏本国カ印度支那ニ付キ我ニ与フル讓歩ニ基キ仏本国ノ物品ニ付キ對価ヲ要求スル場合ニハ右讓歩ノ程度如何ニヨリ我ニ於テモ考慮スル所アルヘシ右ハ具体的ノ問題ヲ生シタル場合ニ至リ攻究スルノ外ナキモ右ニ付キ御意見アラハ申越サレ度シ

六、綿布其ノ他仏本国カ特ニ利害ヲ感スル物品ニ付テハ本国ノ意向ヲ慮リ特ニ留保シアルハ會議録記載ノ通りナリ從テ前記第四項ノ事情ニモ鑑ミ御申越ノ通り最低稅率ノ二割増ヲ以テ切出サルヘク四月三十日付公信ヲ以テ送付シタル説明書記載ノ通り綿布中普通稅率カ最低稅率ノ三割増ニ過キサルモノモアリ二割増トハ格別ノ差異ニモア

日仏間八月十三日會議事録寫送付ノ件

第二九八号(極秘) (八月十五日接受)

往電第二九四号ニ關シ一日延期シ十三日會合ス先方ハ外務、商務、植民、土木ノ關係省代表者当方ヨリハ本使、松島、横山、寺島出席ス

議長「クロウデル」大使開會ヲ宣シ特ニ本件會合ハ最近ノ機會ニ於テ日本ニ満足ヲ与フルコトヲ要ストノ「ブリアン」ノ意見ニ依リ開催ヲ見ルニ至リタルモノナリト披露ス本使ハ外相及仏国委員ノ好意ヲ謝シタル上先ツ印度支那ヲ現行日仏條約中關稅事項以外ノ規定ニ加入セシメ然ル後ニ關稅事項ノ議事ニ及ヒタシト提議セルニ「セルイス」ハ新日仏通商條約ニ印支ヲ加入セシムルニハ異議ナシトセルモ其ノ現行條約加入問題ニ付テハ種々ノ巧言ヲ設ケテ之ヲ承諾セス本使再三之ニ迫ルモ埒開カサルニ依リ然ラハ本使ノ提議ハ暫ク懸案トシ關稅事項ニ關スル仏国提案ヲ承知シタシト切出セルニ「セ」ハ關稅品目ヲ四種ニ大別シ其ノ何レニモ日本ニ米國英領蘭領等ヨリ有利ナル待遇ヲ授クヘキニ付適用品目ニ關スル日本ノ希望ヲ申入レラレタシト詳細ニ説明シ次テ右案ハ仏国側トシテ非常ナル讓歩ナレハトテ日

仏条約改正ニ至ル迄ハ日本ニ於テ仏国品ノ輸入ヲ現状以上ニ困難ナラシメサルコトヲ希望シ更ニ日仏条約商議ノ際ニハ本国品ニ対スル利益付与ヲ考慮スヘシトノ「モラル」ノ保障ヲ求メタルニ付本使ハ我方トシテ印支輸入品ニ最恵国待遇ヲ与フルヲ以テ仏国ノ条件ハ其ノ対価ト思考シ居レリト酬ヒタルニ右ハ印支ニ取り左シタル実益ナケレハトテ保障取付ヲ固守スルカ故ニ然ラハ日印協定成立スルモ日本ニ実益ナキ時ハ右保障ハ失効スヘキモノナラント反問セルニ然リト答ヘ議長「クロウデル」モ日印協定ノ結果日本ニ利アリ印支ニ利ナキハ松平前次官佐分利局長モ既ニ承認ノ所ナリト申添フルアリ本使ハ先方ノ説明ニ感服セサルモ政府ニ取次クヘキニ付テハ其ノ形式ヲ正確ニシタシト述ヘ結局印度支那ニ対スル日本ノ輸出カ今日提議ニ懸ル仏国ノ条件ニ依リテ利益セル程度ニ準シテ日仏条約改訂ノ際日本ヨリ仏国輸出ニ同額ノ利益ヲ提供スヘシトノ德義の約束ヲ求ムト云フ形式トナレリ

前記仏国提案ハ今後会議ノ中心トナルヘキモノナレハ正確ヲ期スル為先方送付シ来ルヘキ「ノート」ニ基キ詳細追電スヘキカ適用品目ニ関スル仏国案ハ十月末迄ニ作成スヘシ

機密公第一二三号

大正十四年十月五日

在仏

特命全權大使子爵 石井 菊次郎(印)

外務大臣男爵 幣原 喜重郎殿

印度支那問題ニ関スル八月十三日會議議事録

写送付ノ件

印度支那問題ニ関スル八月十三日會議ニ於テ其ノ議事録ハ両国委員共同作成スルコトニ相成居リ八月中外務省側ノ手ニ成リタル議事録草稿ヲ送付シ来リタルカ最近更ニ之ヲ商務省側ニテ増補修正セル新草稿ヲ送付シ来レリ之ヲ閲読スルニ唯先方ノ言分ノミヲ書キ列ネタルモノニテ議事録トシテハ可成リ不完全ナルヲ免レス不取敢本使カ同會議劈頭為セル演述ヲ付属書トシテ添付セシムルコトトナシ置キタルモ同議事録ニ依リ仏国側殊ニ商務省ヲ中心トスル所謂事務家カ印度支那問題解決ニ関シ保持スル態度ノ一端ヲ窺知シ得ルモノアルニ付未定稿ナカラ右写三部茲ニ送付ス

日仏通商協定研究委員会八月十三日會議議事

録草稿(訳文)

トノコトナレハ我方ヨリモ夫迄ニ御希望ノ品目種別御申越相成タシ今回一回ノ会合ノ結果ヲ以テ前途ヲトスルヲ得サルモ仏国カ今日ニ至リ印支ノ現行日仏条約加入ヲ応諾セサルカ如キハ其ノ真意ヲ知ルニ苦シム次第ニテ「セ」ノ説明モ植民地ハ本国ト事情ヲ異ニスル為ナリト云フ外傾聴ニ値スルモノナク只管今回ノ會議ヲ以テ関稅事項ノミニ局限セント腐心スルモノナルヤニ看取セラレ本使ニ於テモ甚タ意外トスル処ナリシカ兎ニ角本件ヲ懸案トシ前記ノ通關稅ニ関スル先方ノ意向ヲ糾シ十月末迄ニ原案ヲ作成セシムルコトニ取纏メタルモ入国居住課稅等ニ付条約上ノ保障ヲ取付ケスシテ我ニ取り最利益ヲ感スル品目ニ付僅カニ現行国境稅ノ均霑ト一般稅率ヲ据置キトスルノミニテハ我對印度支那貿易上如何程ノ發展ヲ期待シ得ルヤ疑問アルノミナラス從來ノ我通商條約締結方針ニモ照シスノ如キ變態ハ容易ニ応諾シ得サルモノト存スル処今後ノ交渉方針何分ノ儀御訓示ヲ請フ

(付記)

十月五日在仏国石井大使発幣原外務大臣宛機密公第一二三号インドシナ問題ニ関スル日仏間八月十三日會議議事録写送付ノ件

議長「クローデル」氏 駐日仏国大使

出席者 仏国側

「ド・ソルビエー・ド・プーニヤドレッツ」氏 公使

通商局長

「ヴィルダン」氏 總領事、亜細亞課長代理

「クローンドル」氏 領事

「セルユイス」氏 商務省条約局長

「クルレル」氏 殖民大臣代理

「ダッス」氏 官有船課長 管船院總裁代理

「シエンヌボワ」氏 大藏大臣代理

日本側

石井子爵 在仏日本大使

松島氏 在仏日本大使館參事官

横山氏 同 二等書記官

寺島氏 同 二等書記官

「クローデル」氏 開会ヲ宣シ日本委員ニ對シ歡迎ノ辭ヲ述フ

石井氏 「クローデル」氏ノ好意ヲ謝シ左記提議ヲ以テ結ヒタル演述(別添要訳参照)ヲ為ス

印度支那ハ日仏条約中関稅事項ニ關スル規定ヲ除キ之ニ加入スヘシ大使館ハ右商議ヲ承認セラレタル仏国委員ト交渉ヲ開始シ得ヘシ

「クロードル」氏 石井子爵ハ商業ニ關スル事項ヲ除キ印度支那ノ一九一一年条約加入ヲ求メラルルモノト解ス

「セルユイス」氏 仏国政府カ右ト反対ノ議事順序ヲ予期シタル所以ヲ左ノ通説明ス

大戦以來仏国ノミ關稅率ノ改正ヲ為サス而モ仏国ノ經濟狀態ハ一變セリ新經濟狀態ニ対応スヘキ新定率法制定ヲ俟チ仏国ハ其總テノ通商条約特ニ一九一一年条約ノ改訂ヲ為スコシ故ニ右条約ヲ印度支那ニ延長適用シ之ヲ据置クコト能ハス且又右延長適用ハ極東殖民地ノ規定ト本国ノ規定トヲ混同スルノ弊アリ既ニ一九一一年ニ於テ實際上ノ諸理由ニ基キ右ノ同一扱ハ之ヲ實現スルコトヲ得サリシカ如シ且右ト同一ノ理由又ハ他ノ類似ノ理由ヨリシテ主ナル歐洲諸國ハ種々ノ場合ニ於テ本国トノ關係ト殖民地トノ關係ヲ區別シテ規定スルニ至レリ現ニ最近國際連盟ノ居住問題研究委員會ハ安達氏ノ提議ヲ審議スルニ當リ海外屬地制度ニ關シテ右ノ區別ヲ設クル必要ヲ認め

タリ又理事会カ一九二四年各國ニ致セル勸告中ニモ右ノ區別見ユ然リト雖吾人ハ妥結ノ意無シト云フニ非ス日本ト印度支那トノ關係ニ於テ通商、居住、航海等ノ諸問題ノ同時ニ規定スル一般のニシテ且最終のナル条項ヲ考慮スルハ尚早ナルモ日本ノ最も直接ナル希望ニシテ仏国ノ直チニ為シ得ヘキ讓歩ハ日本ト印度支那トノ貿易ニ対シ一層有利ナル制度ヲ研究スルニ在リ是東京ニ於ケル商議ノ目的トシタル処ニシテ仏国委員ノ準備モ此目的ノ局限シタリ若シ此目的ニシテ達成セラレンカ第一歩ハ茲ニ實現セラレ將來更ニ歩ヲ進ムルコトヲ得可シ

「クロードル」氏 日本ノ議事順序ハ多大ノ遲延ヲ來スヘシ

石井子爵 互ニ同一ノ目的ヲ有スルハ欣快ナルモ多年日印支間ニ横ハル稅率問題ハ益々紛糾ス本件解決ノ道ヲ講センカ為昨年兩國政府カ使節ヲ交換シテ以來六ヶ月何等ノ進捗ヲ見ス本使ノ見ル処ヲ以テスレハ我提議ニシテ容レラレナハ當ニ「時」ヲ益スルノミナラス日本國民ニ大ナル満足ヲ与フヘシ又形式ニ關シテ不便アルトモ實際上不都合無シ

「セルユイス」氏 右議事順序ノ遲延ヲ來タスヘキコトヲ

力説ス寔ニ仏国ト日本トノ關係ハ印度支那ト日本トノ關係ト性質ヲ異ニス仏国法律ハ關稅事項ニ關シテモ居住事項ニ關シテモ兩者趣ヲ同シウセス然レトモ關稅事項ニ關シテハ

印度支那ト日本トノ貿易ニ關スル特別ノ取極ヲ直チニ實現シ得可シ即チ日本ノ利害關係アル商品ニ対シテハ印度支那ニ於テ本国稅率ニ対スル例外ヲ定ムルコトトシ其他ノ日本商品ニ關シテハ印度支那ニ新ニ本国稅率ヲ延長適用スルコトトセハ右日本品ハ一般稅率ノ適用ヲ免ルルコトトナリ有利ナル協定ヲ遂ケ得可シ之ニ反シ居住、航海等ノ事項ニ關シテハ我觀ル処必要ナル準備ヲ為スニハ一層長期ナルコトヲ要シ又更ニ難渋ナリ日本ニ於ケル外國人土地所有法ニ例ヲ採ラムカ本法案ハ既ニ一九一一年ニ議會ニ提出セラレ今尚議決ニ至ラス又仏国ニ於テモ本件學說多少動搖シ居リテ右動搖ハ修交通商條約ノ締結ヲ延滞セシムル虞アリ明確ニシテ直接ナルモノ即關稅協定ノ締結コソ肝要ナレ日本大使ノ述ヘラレタル過去ノ交渉即「デルカッセ」氏ノ調査「メルラン」氏ノ商議ニ之ヲ徵スルモ石井氏ノ提議セラルル処ハ日本カ当初ヨリ企図シタル処トハ異ナリ又我準備及提供ノ順応シ得ル処ニモ非ス

石井子爵 仏国政府ノ稅率ニ關スル提議ヲ承知シ度シ以上討議シタル次第ハ之ヲ政府ニ電報シテ照會スヘク一時本件ハ保留セラレ度シ

「セルユイス」氏 保留セラレタルハ一九一一年條約ノ適用延長問題ナルコトヲ明確ニシ石井子爵ノ求メニ応シ稅率協定ノ仏國側基礎案ヲ説明ス

日本ニ与フヘキ利益ハ印度支那特別制度ノ応用ト本国制度ノ印度支那適用トニ依リ考ヘ得ヘシ

(以下八月二十日付仏國覺書中稅率ニ關スル仏基礎案第一項乃至第四項ト同文)

右ノ讓歩ハ日本ノ要求ニ応シ得ル最大限度ナリ右ノ範圍ニ於テ日本政府カ其要求ヲ明細ニ提示セラレンコトヲ望ム尚右日本ノ要求ニシテ達成セラレンカ一時ハ印度支那自身ニトリテモ仏國ニトリテモ何等之ニ伴フ對價ヲ得サルコトナルヘシ日本カ印度支那ニ提供スル利益ハ其求ムル処ニ比スヘクモ非ス又仏國自身ノ犧牲ノ大ナルハ本件商議ノ惹起シタル憂慮ニ依リテ之ヲ知り得ヘシ故ニ日本カ仏國ニ対シ右等犧牲ヲ補償スヘキコトヲ言明スルト共ニ商議進行中ハ仏國ノ通商ヲ危ウカラシメスト約スルコト公平ナルヘシ

石井子爵 仏国ノ提議ハ之ヲ謝スルモ右妥結ニ於テ失フハ日本ノミナリ

松島氏 日本ハ印度支那ニ於テ叙上ノ利益ヲ獲得スヘキ權利アリ何トナレハ日本ハ印度支那ノ好顧客ニシテ而モ印支ノ輸入者トシテハ第三国ニ代ハルニ過キサレハナリ

「セルユイス」氏 從來ヨリノ印度支那供給国ニ日本カトツテ代ハル權利アリト云フハ穩当ナラス寧ロ右ハ一ツノ利益ニシテ對價要求ニ値ス是通商条約始マツテ以來ノ定説ニ非スヤ

「クローデル」氏 日本委員ニ於テ仏国側ノ讓歩ト日本ノ承諾シタル讓歩即漆、魚醬油等ノ如キ些々タル品目ノ輸入トノ比較セラレタシ

石井子爵 仏国側ノ好意ハ諒承ス又其讓歩ヲ輕視スルニ非サレトモ日本政府ハ印度支那ニ對シ最惠国條款ヲ付与セントスルモノニシテ右ハ非常ナル讓歩ナリ若シ仏国ニシテ商業進行中此上何等カノ保障ヲ求メラルルトセハ日本ハ二重支払ヲナスモノナリ故ニ本件ト日仏兩本国間ノ通商問題トヲ混淆セサルタメ日本ハ印度支那ニ對スル要求ヲ削減スルモ可ナリ

其差額丈ヲ仏本国商業ノタメニ与ヘラレ度シ

石井子爵 了承ス

「クローデル」氏 佐分利氏ハ「キルシェー」氏トノ会談ニ於テ又松平氏モ仏国ノ犠牲ハ對價ニ値スルコトヲ認メタリ

「ド・ソルビエー」氏 仏国委員ハ討議ニシテ前述ノ基礎ノ上ニ行ハルルナラハ準備成リ居ル次第ナリ

石井大使 日本政府ニ對シ右基礎ノ上ニ討議ヲ為スヤ否ヤ電報スヘシ

「セルユイス」氏 日本政府ニ於テ異議無クハ十月末会合ノコトト致度シ

「ド・ソルビエー」氏ヨリ仏国側ノ讓歩ヲ列記シタル覚書ヲ在仏日本大使館ニ送付スルコトヲ提議シ採用セラル「クローデル」氏ハ兩國委員協議ノ上議事録作成ノコトニ決セシム

閉会

(別添)

石井大使演述要訳

仏国政府カ一九一一年日仏条約ノ改訂ニ依ル一般通商条約

「セルユイス」氏 日本政府ハコノ二件ヲ併セ議スルコトニ異議無カル可シ何トナレハ日本カ仏国ニ要求スル犠牲ノ對價ハ之ヲ印度支那ニ与フルコトヲ得サレハナリ今日迄ノ日本ノ要求スル処ト提供スル処トニ就キテ觀ルニ日本ハ印度支那ニ於テ幾億法ヲ売り得ルコトナリ印度支那ハ日本トノ關係ニ於テ殆ト得ル処無シ而テ一見植民地ニ對シ要求セラルル犠牲タルヤ実ハ仏本国ノ産業ニ及フモノナレハ少クトモ將來ノ協定ニ對スル約束ノ形式ニ於テ之カ對價ヲ保障セラルルハ当然ナリ最近ノ仏国政府ニ對スル關稅委員會ノ攻撃モコノ見込アルカ故ニ撤回ヲ見タルナリ

松島氏 英米ニ与フル処ハ對價無ク日本ニモ与フヘキナリ「セルユイス」氏 實際上右二国ハ仏国力印度支那ニ於テ与ヘサル処ヲ他ニ於テ我ニ報イルナリ

石井子爵 日本政府カ仏国側ノ求メラルル約束ニツキ危懼セサル様希望セラルル對價ヲ明確ニセラレ度シ

「セルユイス」氏 右ハ消極的ノモノニ過キス日本ハ税率ヲ引上ケントセラルルカ如キモ条約締結迄仏国製產品ニ對シテハ右引上ヲ差控ヘラレ度シ又今次ノ協定カ日本ニ齎ス利益ヲ表ニ作り之ヨリ印度支那ノ得ヘキ利益ヲ控除シ而テ

ノ締結ヲ俟タス日本ト印度支那トノ通商關係制定ノ為商議開始ヲ決セラレタルハ欣快ニ堪ヘス

右決定ハ平素ノ良好ナル日仏關係ト相俟チ兩國ノ緊密ナル經濟的提携ニ決定の一步ヲ進ムルモノトシテ日本政府並ニ國民ニ深甚ナル喜悅ヲ与ヘタルハ言フヲ須ヒス仏国ノ他ノ植民地カ何等ノ留保又ハ条件無クシテ加入セル日仏通商条約ニ印度支那獨リ加入セサルハ日本ノ輿論ノ常ニ憂慮スル処ニシテ太平洋ノ經濟圈ニ於テ重要ナル單位タル印度支那カ僅カニ税率問題ノ為ニ日仏兩國間ニ存スル感情ト利害關係トニ一致セサル對日關係ヲ有スルニ止マルカ甚遺憾ナリ且又日本政府ハ印度支那ノ特殊ノ地位及其税率問題ニ關スル正当ナル懸念ハ克ク之ヲ諒承ス

日本政府ハ各自ノ利害關係ヲ明確ニシテ始メテ実効アル協調ヲ達成シ得ヘキコトヲ確信スルカ故ニ本件ニ關シテハ仏本国ノ特權及印度支那ノ産業ヲ阻害セサル解決ヲ見出スニ努メ来リコノ意味ニ於テ一九二四年ノ印度支那使節ヲ迎ヘ又最近山県公爵ヲ印度支那ニ特派セリ右兩使節ハ親シク兩國商業ノ狀況ヲ研究シ得タルノミナラス印度支那ノ利益擁護ニ關シ率直ナル會談ヲ為スコト數次兩者ノ經濟的接近

ヲ計レリ右意見交換ハ非公式ノモノナリト雖友好ノ精神ヲ以テ両国共ニ満足ナル一致点ヲ見出サントスル吾人ノ仕事ニ寄与スル処斡カラス

日本ハ前述ノ事情ヲ顧慮シ特別ノ表ニ掲クヘキ――

(一)仏本国ノ特ニ利害關係アル商品及(二)印度支那ノ商工業ニ特ニ利害關係アル商品ニ關スル事項ヲ除キ印度支那カ日仏条約ニ加入セラレンコトヲ提議ス而テ印度支那ノ条約加入問題ニ關シ相互意見ノ一致ヲ得ハ右ノ品目表及稅率ノ討議ハ之ヲ専門委員ニ一任シ度ク列席ノ大使館員ヲシテ此重要ニシテ機微ナル仕事ノ為ニ御指名アル貴方専門家ト共ニ之ニ当ラシムルコトト致度シ

先ツ本使ノ希望ニ堪ヘサルハ印度支那条約加入ノ原則ニ關シ妥結ニ達センコトニシテ本件ハ日本ノ輿論ニ其重キヲ置ク精神の満足ヲ与ヘ日仏親交ニ更ニ一因ヲ加フヘク而モ前述ノ周到ナル留保ニ依リテ仏本国又ハ亜細亞ノ仏國ノ正当ナル利益ヲ阻害セサルヘシ

二〇六 八月二十日 在仏国石井大使ヨリ
幣原外務大臣宛(電報)

仏國側ノ提議セル關稅基礎案報告ノ件

二〇七 八月二十日 幣原外務大臣ヨリ
在仏国石井大使宛(電報)

四種類別關稅品目ノ各内容及ビ仏側ヨリ送付サルベキノート入手ノ上電報方指示ノ件

第二一六号(極秘)

貴電第二九八号ニ關シ

四種ノ關稅品目トハ大体如何ナルモノナリヤ電報アリタク尚先方ヨリ送付スヘキ「ノート」ハ成ルヘク速ニ御入手ノ上電報方取計アリタク今後ノ方針ハ其ノ上ニテ申進スヘシ

二〇八 八月二十二日 在仏国石井大使ヨリ
幣原外務大臣宛

日本・インドシナ通商問題ニ關スル仏國覺書

写送付ノ件

付屬書 右仏國覺書写

機密公第一〇五号

大正十四年八月二十二日

在仏

特命全權大使子爵 石井 菊次郎

外務大臣男爵 幣原 喜重郎殿

七 日仏通商航海条約改定交渉 二〇七 二〇八

第三〇三号(極秘) (八月二十一日接受)

往電第二九八号ニ關シ

二十日仏國「ノート」入手右ニハ「セルイス」ノ説明セル点ヲ(略?)迄網羅シ居ルカ關稅ニ就キ仏國ノ提議セル基礎案ハ左ノ通

(一)印度支那ハ特別關稅制定權ヲ有シ居ル処日本ハ或種品目ニ就キ現行特別關稅率ノ利益ヲ受クヘク更ニ印度支那生活必需品ニシテ何等本國品トノ競争起ラサルモノニ就テハ新ニ特別稅率ノ制定ヲ求メ得ヘシ

(二)從來隣接國主トシテ支那產物ニ与ヘタル特別關稅ハ或ル程度ニ於テ何レカヨリ來タル日本原產同種物品ニ延長適用スルコトヲ得ヘシ

(三)印度支那ニ本國現行ノ一般稅率ヲ適用シ現在日本ノ受ケ居ル印度支那一般稅率ヲ中間稅率ニ引直スコトトセハ日本ハ本國ノ一般稅率ノ適用ヲ受クル多数ノ競争者トノ關係ニ於テハ有利ナル地位ニ立ツヘシ

四少數品目ニ就テハ本國最低稅率ヲ与フヘシ但シ必要ナル場合ハ船賃及生産條件ノ差異ヲ補償スル為割増ヲ付加スルモノトス

日本印度支那通商問題ニ關スル仏國覺書送

付ノ件

八月十三日当國外務省ニ於テ開催セラレタル日本印度支那通商問題協議會ノ席上「セルイス」ハ仏國ノ方針ニ付説明ヲ為セルカ其ノ際本使ヨリ日本ニ許与スヘキ關稅利益ニ關スル部分ニ付テハ正確ヲ期スル為書面ヲ以テ回示アリ度キ旨申出置キタルニ今般「セルイス」ノ説明全般ヲ尽セル覺書ヲ送付越セリ依テ右写三部茲ニ送付スルニ付御査閱相成度シ

(付屬書)

仏國側覺書写

MEMORANDUM

L'accord dont la négociation a été engagée le 13 août, ne doit régler, dans l'opinion du Gouvernement français, que la question des échanges commerciaux entre le Japon et l'Indo-Chine.

Il ne serait d'ailleurs pas désirable que cet accord fût réalisé par l'extention pure et simple de la Convention franco-japonaise de 1911 à l'Indo-Chine, même

si le Japon ne devait pas recueillir l'intégrité des avantages résultant de cette extension.

En effet, la Convention de 1911 ne correspond plus aux nécessités des relations commerciales entre le Japon et la France: le Gouvernement français l'a dénoncée et le Gouvernement japonais en a lui-même proposé la révision; il ne serait donc pas expédient de consolider cette Convention, qui ne correspond plus au système contractuel de la France et qui ne satisfait pas le commerce japonais, en la prenant pour base du statut des échanges entre le Japon et l'Indo-Chine.

D'autre part, la Convention de 1911 comporte, notamment, en matière d'établissement et de navigation, des stipulations dont la France ne saurait prévoir l'extension au moment où elle envisage la modification du système sur lequel ces stipulations sont fondées.

Au contraire, en matière d'échanges commerciaux,

notamment, de la Chine, pourraient être étendus, dans une certaine mesure, et pour des articles dénommés, aux produits similaires, originaires et en provenance du Japon.

3°—Par l'institution en Indo-Chine du tarif de la métropole et la conversion en droits intermédiaires, calculés sur la base de ce tarif, des droits du tarif général local, auquel le Japon est actuellement soumis, celui-ci se trouverait privilégié par rapport à de nombreux pays concurrents, qui subissent le taux du tarif général de la métropole.

4°—Enfin, l'octroi pour un petit nombre d'articles du tarif minimum de la métropole n'est pas exclus, si du moins le tarif est, dans le cas où il apparaîtra nécessaire, majoré de surtaxes compensant la différence des frêts et la différence des conditions de la production, grâce auxquelles le Japon se trouve avantage par rapport à ses concurrents européens.

Il serait utile que la Convention projetée octroiera

le Gouvernement français estime qu'un accord pourrait être assez rapidement réalisé et il est prêt, pour répondre au désir du Gouvernement japonais, à recourir aux divers moyens que lui fournissent, non seulement la législation douanière française, mais aussi le système douanier propre à l'Indo-Chine.

1°—Le système douanier spécial à l'Indo-Chine comportant l'institution de droits locaux, tant au tarif minimum qu'au tarif général, le Japon pourrait, pour certains articles, recueillir le bénéfice du taux le plus favorable des tarifs spéciaux en vigueur, et peut-être même, obtenir l'établissement de tarifs nouveaux pour des produits qui intéressent particulièrement la consommation indochinoise et ne concurrençant pas effectivement les produits de la métropole.

2°—Les droits locaux exclusivement accordés jusqu'ici à certains produits de pays limitrophes et

au commerce japonais ne pourront, en tout état de cause, trouver une équitable compensation dans le seul octroi des facilités douanières accordées par le Japon à l'exportation indochinoise et ils ne pourront pas non plus être consentis sans préjudice pour le commerce de la France avec ses possessions d'Extrême-Orient.

En conséquence, le Gouvernement français désirerait recevoir, dès avant la reprise des négociations fixée au 26 octobre 1925, l'assurance que les avantages accordés non seulement aux produits indochinois, aux termes de la Convention dont la négociation se poursuit, mais, aussi, dans une juste mesure, au commerce français avec le Japon, aux termes de la Convention nouvelle que les deux Gouvernements envisagent de substituer à la Convention de 1911.

En outre, le Gouvernement français consentant à ce que cette convention nouvelle ne soit négociée

qu'après l'accord qui doit régler les échanges entre le Japon et l'Indo-Chine, la France devrait recevoir, dès maintenant, l'assurance qu'au cours de la négociation de cet accord, et jusqu'à la conclusion de la Convention destinée à régler les rapports des deux métropoles, le Japon s'abstiendra de toute aggravation du régime douanier auquel sont actuellement soumis les produits français au Japon./

(右和訳文)

仏国覚書訳文(秘)

八月十三日商議ヲ開始シタル今次ノ協定ハ仏国政府ノ意見トシテハ日本印度支那間ノ商業上ノ関係ノミヲ規定スヘキモノナリ
且又仮リニ現行日仏条約ノ適用延長ニ依リ日本カ其全部ノ利益ヲ享クルコト無シトスルモ尚ホ一九一一年ノ日仏条約ヲ其儘印度支那ニ適用スルコトニ依リ協定ヲ遂クルハ望マシカラス

思フニ一九一一年ノ条約ハ日仏間ノ商業関係ノ必要ニ適応セス仏国政府ハ之ヲ廃棄シ日本政府自身モ之カ改訂ヲ提議

ツツアル印度支那一般税率ヲ右本国一般税率ヲ基礎トシテ算定シタル中間税率ニ引直ストセハ日本ハ本国一般税率ノ適用ヲ享クヘキ多数競争国トノ関係ニ於テ特惠ヲ享クヘシ

四、最後ニ少数品目ニ対シテハ必要ノ場合少クモ日本カ欧州競争国ニ比シ利益ヲ得ツツアル運賃及生産費ノ差額ヲ割増スルコトトセハ之ニ本国最低税率ノ適用ヲ辞セス
日本ノ要求ヲ以上列記ノ各項ニ依リ品目別トスルコト便ナルヘシ今次ノ条約カ日本ノ商業ニ与フヘキ利益ノ公正ナル対償ハ到底印度支那ノ対日輸出ニ対スル特典ノミニ依リ之ヲ求ムヘカラス又右ノ利益ハ必スヤ仏本国ノ其極東植民地ニ対スル商業ニ損害ヲ与フヘシ

依而仏国政府ハ一九二五年十月二十六日ノ商議再開ニ先立ち印度支那ニ於テ付与セラルヘキ日本ノ利益ニ関シ印度支那製産品ニ対シテハ現ニ商議継続中ナル日印支条約上仏本国ノ対日輸出ニ対シテハ相当ノ限度ニ於テ兩國政府カ一九一一年条約ニ代ラシメントスル新日仏両本国条約ニ於テ之カ対償ヲ与フヘシトノ保障ヲ得ンコトヲ希望ス

尚ホ仏国政府ハ日本印度支那間ノ通商ヲ規定スヘキ協定成

セリ随而仏国ノ契約主義ニ適合セス又日本ノ商業ヲ満足セシメサル右条約ヲ日本印度支那間通商関係規律ノ基礎ト為シ之ヲ続行スルコト便ナラサルヘシ又他方ニ於テ一九一一年条約中特ニ居住及航海事項ニ関シテハ仏国カ現ニ原則改正方ヲ考慮シツツアル規定アリテ右等規定ノ適用延長ハ之ヲ認ムルコトヲ得ス

反之商業事項ニ関シテハ協定ノ成立容易ナル見込ニシテ仏国政府ハ日本政府ノ希望ニ応センカ為仏本国關稅法規ノミナラス印度支那特有ノ關稅制度ノ許ス限リ各種ノ方法ヲ尽サントス

一、印度支那關稅制度ハ一般最低兩率ニ関シ特別税率ヲ有シ得ルカ故ニ日本ハ或種ノ品目ニ対シ現行特別税率中最モ有利ナル税率適用ノ利益ヲ享クヘク又印度支那ノ生活必需品ニシテ且本国製産品ト事実上競争ヲ惹起セサル品目ニ就テハ新ニ右特別税率ノ設定ヲ求メ得ヘシ

二、現在隣接國境國殊ニ支那ノ或種製産品ニ限リ与ヘツツアル特別税率ヲ或程度ニ於テ品目ヲ特定シ同種日本製産品ニシテ日本ヨリ輸入セラルルモノニ延長適用シ得ヘシ
三、仏本国現行税率ヲ印度支那ニ適用シ現在日本品ノ享ケ

立後日仏両本国間新条約ノ商議開始ヲ承諾スルモ一面ニ右協定商議開始ノ時ヨリ両本国關係ヲ規定スヘキ条約締結ニ至ル迄日本ハ現ニ仏国製産品カ日本ニ於テ受ケツツアル關稅ヲ重カラシメストノ保障ヲ今ヨリ得置度シ

二〇九 九月一日 在ジュネーヴ(出張中) 石井大使ヨリ
幣原外務大臣宛(電報)

インドシナヲ日仏通商条約ニ加入セシメソノ

關稅問題ノミヲ別協定トセントノ日本側提議

ニブリアン外相同意ノ件

第七七号(極秘) (九月二日接受)

本使昨三十一日当地着本日仏国外相ニ面談セリ「ブリアン」氏ハ倫敦ヨリ歸リ直ニ休暇ヲ取リシ為印度支那ヲシテ日仏通商条約ニ加入セシメ唯其關稅ニ關スル問題ヲ引離シテ別協定セントノ本使ノ提議ニ付詳細セルイス局長ニ説明シ之ヲ「ブ」ニ取次方ヲ依頼シ置キタルカ此機ニ於テ更ニ敷衍シテ右提議カ仏本国ト印度支那トニ何等損失ナクシテ(脱)所以ヲ説明シタルニ「ブ」氏ハ過日同局長ヨリ一応ノ説明ヲ聞キタルモ今本使ノ説明ニ依リ愈日本提議ノ理由アルヲ確知シタリトテ全然同意ヲ表シ直ニ「ケイドルセ

イ」ニ訓令ヲ送ル事ヲ承諾セリ

在仏大使へ暗送セリ

二二〇 九月十一日 在仏国松島臨時代理大使ヨリ
幣原外務大臣宛(電報)

関税問題ヲ加入問題ト並行シテ進捗セシメル
意向ニツキ我方要求ノ関税品目表ノ送付方
要請ノ件

第三三二号(極秘) (九月十二日接受)

往電第二九八号中段ニ関シ仏国側ヨリ印度支那ニアル「キ
ルシエ」ヲ呼寄スル都合アルニ付十月二十六日関税ニ関ス
ル會議ヲ開クモノト心得差支ナキヤト問合セ来レリ印支ノ
日仏条約加入問題ニ付テハ外相ノ意向ハ石井大使寿府發電
第七七号ノ通ナルモ九月二日「セルユイス」ハ同大使ニ対
シ不相變時代遲ノ現行條約ニ印支ノ加入スルコトヲ攻撃シ
居タル由ナレハ本件ノ決定ニハ尚幾多ノ経緯アルヘキモ加
入問題ト関税問題トハ並行シテ進捗セシメ差支ヘナシト思
考スルニ付十月末迄ニ間ニ合フ様我方ノ要求スヘキ関税品
目表ヲ当館ニ御送付シ得ラル可キヤ先方へ回答ノ都合モア
ルニ付御見込御電示アリ度シ石井大使ト打合せ済ミ

第二五七号(極秘)

貴電第三三六号ニ関シ

当地仏代理大使ヨリモ略同様ノ申出アリ今次ノ税率協定ヲ
遂クルト同時ニ印支ヲ現行日仏條約ニ加入セシメ度ハ往電
第二〇九号一ノ通ナルカ右實現シ難キ場合ニハ此際先以テ
印度支那問題ニ就キ何等カノ協定ニ到達シ尚今後ノ努力ニ
依リテ漸次ニ地歩ヲ固ムル外無キヤニ思考シ居ル次第ニ付
先方ニ於テ強ヒテ加入ニ反対スル場合ニハ條約加入ノ形式
ヲ採ラス印支ニ関スル特別ノ協定ヲ為サムコトヲ提案シ更
ニ先方ニ於テ此際印支ニ関シ詳細ナル條項ヲ協定スルヲ困
難ナリト為スニ於テハ暫行規定トシテ Etablissement 及
Navigation 等ニ関シ必要ナル條項ノミヲ含ム簡單ナル特
別協定ヲ結フモ一案ナル可シト思考ス右ニ付閣下ニ於テ御
意見アラハ御申出アリタク然ラサレハ右ノ趣旨ニテ適宜先
方ト御交渉ノ上結果回電アリ度シ

二二三 九月二十五日 幣原外務大臣ヨリ
在仏国石井大使宛

インドシナ税率表ニツイテノ我方要求ニ関
スル件

二二一 九月十九日 在仏国松島臨時代理大使ヨリ
幣原外務大臣宛(電報)

日仏條約ヘノインドシナ加入問題ヲ商議セズ
トノ仏側主張ヲ容レザル限り関税會議ヲ開催
シ難キ旨仏外務省ヨリ申越シノ件

第三三六号(極秘) (九月二十日接受)

往電第三三二号及貴電第三四五号ニ関シ

印支関税ニ関シテハ十月末會議ヲ開キ得ル見込ナル旨外務
当局ニ回答スルト同時ニ右ハ印支ノ現行日仏條約加入問題
ヲ断行シタル次第ニハアラサル旨付言シ置キタル所外務当
局ヨリ日本政府ニ於テ此際印支加入問題ヲ商議セストスル
仏国側ノ主張ヲ至急容レラレサル場合ニハ十月末ニ間ニ合
フ様委員(主トシテ印度支那委員ヲ指ス)ヲ招集シ難キ旨
婉曲ニ申越セリ就テハ右ニ対シ如何応酬スヘキヤ至急御訓
電アリタシ

二二二 九月二十五日 幣原外務大臣ヨリ
在仏国松島臨時代理大使宛(電報)

仏側ガインドシナノ日仏條約加入ニ反対ノ場
合特別協定ノ締結ニツキ交渉方指示ノ件

通一機密第二一号

大正十四年九月二十五日

外務大臣男爵 幣原 喜重郎

在仏

特命全權大使子爵 石井 菊次郎殿

仏領印度支那税率協定ニ関スル件

本件ニ関シ往電第二〇九号四末段仏領印度支那税率表中我
方ノ要求スヘキ各品目ニ対スル最終讓歩案(別添A表)第
十八類化学製品ニ関スル我方要求品目表(別添B表)仏領
印度支那生産品ニ対スル本邦輸入税軽減案(別添C表)本
邦輸入品中仏本国ノ利害關係アルモノニシテ軽減ノ余地ア
リト考ヘラルル品目表(別添D表)及貴電第三三二号末段
我方ノ要求スヘキ関税品目表(別添E表)茲ニ御送付ス
以下右ノ各表ニ就キ必要トスル説明ヲ加フ
一、(イ)A表ハ關係各省トノ協議ニ使用シタルモノナリ我最
終讓歩案ハ同表下欄ニ記入シタル巴里交渉ニ於テ要求ス
ヘキ税率第二案ニシテ右第二案算定ノ基礎的標準ヲ表示
スレハ左ノ通ナリ

印支現行一般税率ノ四大別		第二案算定ノ標準
(一)	一九二一年三月二十八日以前ノ 仏本国一般税率即チ最低税率ノ 約五割増ノモノ	現行一般税率ヨリ一割乃 至一割五分引
(二)	一九一〇年三月二十九日以前ノ 仏本国一般税率ニシテ最低税率 ノ約三割増ノモノ	同 右
(三)	現行仏本国一般税率ニシテ最低 税率ノ四倍ニ当ルモノ	一九二一年三月二十八日 以前ノ一般税率換言スレ ハ最低税率ノ約五割増
(四)	現行仏本国一般税率ニシテ最低 税率ノ約二倍ニ当ルモノ之ニ属 スルモノハ大体ニ於テ一九一〇 年三月二十九日以前ヨリ実行セ ラレ居ルモノナリ	最低税率ノ五割増

而シテ品目ニ依リ必スシモ右表ノ原則ニ拠ラサルコトアルハ貴電第二九八号先方申出ノ趣旨ニ基キ米國待遇下同等若クハ夫以上有利ナル様算定シタルト關係省トノ協議ノ際本邦品生産条件若クハ輸出見込等ヲ考慮シテ或種ノ例外ヲ設ケタルトニ依ル

(ロ) A表下欄巴里交渉ニ於テ要求スヘキ税率第一案ハ今次交渉ノ端緒トシテ上議セラルヘキモノナリ從來日本ト印度支那間ニ行ハレタル東京及印度支那ノ商議ハ孰レモ非公式ノモノニシテ其ノ結果作製セラレタル會議録ハ共ニ何

モ右ハ他ノ綿糸綿布ニ關スル当方主張ノ貫徹ヲ容易ナラシメムカ為ノ讓歩ナルニ付交渉ノ際先方ニ於テ右讓歩ニ差シテ重キヲ置カサル模様ナラハ右ノ如キ區別ヲ設ケサル方寧ロ当方ノ希望スル処ナリ右御含置ヲ請フ

(ハ) 尚ホ綿布ノ項ニ關シ「タオル」ハ税番四一二中ニ包含スルモノト認メラルルモ為念先方ニ御問訊シ相成度若シ右税番以外ノモノナルトキハ「タオル」所屬ノ税番ヲ追加セラレタシ

(ト) 又綿布「染メタルモノ」ニ關シ柿色紺色綿布ハ印支輸入品ノ大部分カ仏國品以外ノモノナルコト及西貢ニ於テ先方言明ノ次第モアルコトニツキ特ニ最低税率ヲ御協定相成様致度シ

(ケ) 税番四四九絹織物ニ關シテハ第一案トシテ支那產特別税率第二案トシテハ支那產特別税率又ハ最低税率ヲ要求シアル処茲ニ最低税率ト云フハ仏國税率表中極東產以外ノモノニ付品種ニ依リテ區別セラレタル各種ノ最低税率ヲ指スモノナリ右支那特別税率中ニハ羽二重ヲモ包含セシメ度キ意向ナリ

二、B表備考欄ニ於テ成ルヘク最低税率要求ノコトトアル

等兩國政府ヲ拘束スルモノニ非ス單ニ兩者ノ意向ヲ明ラカニシ將來開カルヘキ正式交渉ノ進行ヲ容易ナラシメムトシタルモノニ過キス隨而今次ノ交渉ニ於テハ列記品目ニツキテ先ツ最低税率ヲ要求スヘキモノナルニ付第一案ハ總テ最低税率ヲ掲ケルコトトセリ

(ハ) 但綿糸ニ就テハ先方累次ノ声明ニ鑑ミ特ニ最初ヨリ最低税率ニ割増ヲ要求スルコトトシタルモ税番三六八單繮ノモノニシテ生ノモノノ最初ノ二目ニ關シテハ偶々米國待遇カ最低税率ト同一ナルコト交渉ノ際特ニ先方ノ注意ヲ喚起セラルル様致度シ

(ニ) A表上欄税番又ハ税目ノ上ニ×印ヲ付シタルハ今次ノ交渉ニ於テ提議スルコトヲ差控ヘントスルモノナリ斯ノ如ク要求品目ノ數ヲ限定シタルハ上記綿糸ニ割増要求ト共ニ当方カ誠心誠意本交渉ノ成立ヲ希望スルタメニ外ナラス

(ハ) 但綿糸税番三六八ニ就キテハ一疋ニ付八一、〇〇〇米突ヲ超エタルモノ同税番三六九ニ付キテハ一疋ニ付一四一、〇〇〇米突ヲ越エタルモノ又綿布ニ關シテハ百平方米ノ重量七疋ニ達セサルモノ全部削除ノコトニナリ居ル

ハ本邦ヨリノ輸出見込ニ基クモノナリ硫酸醋酸ニ關シテハ印支協議ノ際先方ニ於テ最低税率付与ニ異存ナキ旨言明シタルヲ以テ右事実ヲ御参考迄記載シ置キタル次第ナリ又「ダイオキシアセノベンゾール」(サルバルサン)云々ト記入シタルハ同製品ノ所屬税番不明ナルカ為ニシテ交渉ノ際右御問訊ノ上同税番御追加相成度シ

三、C表中紅茶ノ低減ニ關シテハ現行贅沢税トノ關係上機微ナル問題存スルニ付大藏省ノ決定ヲ俟チ追而電報スルコトト致度シ

四、(イ) D表ハ本邦輸入品中仏國ヨリ申出アル場合ニ減税ヲ考慮シ得ヘキ品目ヲ掲ケタルモノニシテ減税ノ程度ハ實際問題トナリタル場合ニ決定セントスルモノナリ○印ヲ付シタルモノ以外ノ物品ハ減税シ得サルモノナルヲ以テ始メヨリ問題トセサル様御注意アリ度シ

(ロ) ○印ヲ付シタル九五植物性芳香揮発油ニ關シテモ現行贅沢税トノ關係アルニ付前記大藏省ノ方針決定ヲ俟チ何分ノ儀申進スヘシ

(イ) ○印ヲ付シタル二一〇「モルヒネ」「コカイン」及二二九別号ニ掲ケサル藥材化學藥及製藥ニ就テハ内務省ト

協議ノ上結果追報スヘシ

五、E表ニ関シ貴電第三〇三号仏国「ノート」写末タ接到セサルニ付差当リ左ノ通別添E表ノ第一表乃至第五表ヲ作成セリ

第一表 最低税率ヲ要求スヘキモノ

第二表 最低税率ヲ幾分引上タルモノヲ要求スヘキモノ

第三表 旧一般税率ヲ幾分引下ケタルモノヲ要求スヘキモノ

モノ

第四表 支那産特別税率ヲ要求スヘキモノ

第五表 以上ノ分類ニ属セサルモノ

而テ税率協定ノ駆引ヲ顧慮シ我方最終譲歩案ヨリ一段有利ナル分類ニ各品目ヲ割当タリ就テハ先方ヨリ関税品目表提出方請求アリタル場合ニハ御見込ニ依リ右E表ヲ我方要求分類表トシテ御提示相成様致度シ且原則トシテ歩合協定ハ最低税率ヲ基礎ト為スコト将来ノ関税改正ニ対シ有利ナルヘキニ付第三表ノ旧一般税率ヲ幾分引下タルモノヲ要求スヘキモノニ関シテハ最低税率三割五分乃至二割七分五厘増ノコトトシテ御交渉相成度シ

六、尚ホ税率自体ニ就テハ結局ニ於テ最惠国待遇ノ保障ヲ

ケテ我ト競争スヘキモノハ事実上アリ得可カラサル次第ニ付現行印支一般税率ヨリ軽減方ヲ要求スル趣旨ニ出デ度ク此趣旨ニテ当方分類表ヲ作成セリ

二、仏「ノート」末段本邦現行税率据置方ニ関シ日仏両本
国間条約改訂交渉ノ時期並ニ本邦関税率改正実行ノ時期共
ニ予測シ難キニ付今日ヨリ右ノ如キ保障ヲ与フルハ事実上
不能ナリ但日印交渉ノ結果如何ニ依リテハ日仏条約商議ノ
際仏本国品ニ対シ幾分考慮ヲ加フトノ言明ハ之ヲ与ヘ得ヘ
シ

二一五 十月六日 在ハイフォン山村領事館事務代理ヨリ
幣原外務大臣宛 (電報)

キルシェーノ動静報告ノ件

第二九号 (極秘)

貴電第二五号ニ関シ

「キルシェー」氏ハ北京関税会議ニ出席セス九月二十一日
日仏商議ニ意見ヲ供スル為メ帰仏スヘキ電命ニ接シ二十八
日「ダラー」ヨリ帰り十月一日乗船帰仏セリ

二一六 十月七日 出淵外務次官ヨリ
大藏、農林、商工各次官宛

七 日仏通商航海条約改定交渉 二二五 二二六

得サル結果ヲ生スル場合ニ於テモ係數ノ適用ニ関シテハ
少クトモ最惠国待遇ヲ取付ケ置カルル様特ニ御配慮アリ
度シ尤モ仏本国ニ於テ本邦品ニ対シ係數ヲ課シ居ルコト
ニ就テハ曩ニ抗議ヲ提出シ居レル次第ニシテ条約上仏国
側ノ權利トシテハ我方ニ於テ未タ承認シ居ラサル所ナル
ニ付本項ハ單ニ印度支那ノミニ関スルモノナルハ勿論ナ
リ為念

編註 別添A、B、C、D、E各表省略

二一四 十月一日 幣原外務大臣ヨリ
在仏国石井大使宛 (電報)

インドシナ関税品目表及ビ関係書類送付ノ件

第二六一号 (極秘)

一、往電第二四五号ニ関シ品目表及関係書類二十五日發送
セリ右品目分類表ハ其後接到セル仏「ノート」写中ノ仏基
礎案トハ相違シ居ルニ付必要アラハ貴方ニ於テ基礎案第一
ニ該当スルモノヲ摘出セラルル等適宜按配セラレタシ仏基
礎案第三ハ仏本国一般税率ヲ印支ニ適用シ現在日本ノ受ケ
居ル印支一般税率ヲ据置キ競争上我ニ有利ナラシメントノ
趣ナル処仏本国一般税率ハ禁止の高率ニシテ之カ適用ヲ受

關係各省保官會議デ決定セラレタル対仏交渉

方針ニ関スル件

通一機密合第五三〇号

仏領印度支那条約加入ニ関スル件

本件ニ関シ八月二十日ノ關係各省保官會議ニ於テ交渉方針
一応決定セラレタルヲ以テ右方針ニ依リ数次ノ技術官會議
ヲ開催シ研究審議シタル左記諸案ヲ九月二十一日ノ保官會
議ニ上程シ別添各表ノ通決定セラレタルニ付右茲ニ御送付
ス

記

一、本邦輸出品ニ対スル仏領印度関税軽減要求案 (別添
「日本輸入品ニ適用スヘキ仏領印度支那関税制度ノ研
究」下欄ニ記入シタル巴里交渉ニ於テ要求スヘキ税率第
一案及第二案参照)

一、仏国税表第十八類化学製品ニ関スル我方要求品目表

一、仏領印度支那生産品ニ対スル本邦輸入税軽減案

一、本邦輸入品中仏本国ノ利害關係アルモノニシテ軽減ノ
余地アリト考ヘラルル品目表

尚ホ本件巴里交渉第一回会合 (八月十三日) ニ於テ論議セ

ラレタル諸点ニ関シ仏国側ヨリ在仏石井大使宛提出シタル
覚書写其後接到シタルニ付右原文並ニ訳文何等御参考迄併
セ御送付ス

二一七 十月八日

在仏国石井大使ヨリ
幣原外務大臣宛(電報)

日仏交渉再開ノ場合他問題ヲ暫ク懸案トシ関
税問題ノミヲ進メルコトトシタキ旨意見具申
ノ件

第三五二号(極秘)

(十月九日接受)

貴電第二五七号ニ関シ

寿府発ノ往電第七七号本使「ブリアン」間ノ話合ハ意外ニ
モ当国外務ト商務植民両省トノ間ニ爭議ヲ起シ外務省躊躇
ノ色アルニ至リ此ノコトヲ聞キ付ケタル「ルシュール」氏
ハ右「ブリアン」本使ノ談話ノ途中ヨリ参加シタル行懸ア
リタルヲ以テ「ゼネバ」ヨリ電話ヲ以テ外務主任ニ説明シ
往年「デルカセ」ノコトアリ今又「ブリアン」氏ノ然諾ヲ
翻ヘス様ニテハ仏国ノ威信ニ関ストテ強ク主張シヤリタル
旨本使ニ内話アリタルカ次テ商務省条約局長「セルイス」
ハ「ゼネバ」ニ於テ如何ニ「ブリアン」カ承諾シタリトテ

号ノ書類モ着クヘク且過日植民大臣ノ言ニ「キルシェー」
ヲ呼寄タレハ彼ハ来ル二十五日頃着巴ノ予定ナリトアリ旁
本月末ニハ関税ノ交渉ヲ始め得ヘシト思ハル

二一八 十月十日

幣原外務大臣ヨリ
在仏国石井大使宛(電報)

関税問題ノミ審議ヲ進メルコトニ異議ナキ旨
回訓ノ件

第二六五号(極秘)

貴電第三五二号ニ関シ

貴見ノ通函問題ヲ懸案トシ置キ関税問題ノ審議ニ進マレタ
シ

二一九 十月二十二日

在仏国石井大使ヨリ
幣原外務大臣宛(電報)

赴任途上リヨニニ於ティンドシナ新総督関税
問題ニ関シ談話ノ件

第三六八号

(十月二十三日接受)

赴任ノ途ニ在ル新印支総督ハ里昂ニ於ケル歓迎会席上同地
商業會議所ノ一員ヨリ近ク印支関税ニ関シ日本ニ譲歩スル
旨ノ情報アルモ右ハ印支並本國ノ産業ニ対スル大脅威ナリ
七 日仏通商航海条約改定交渉 二一八 二一九 二二〇

本件主管者タル商務省ハ到底同意スル能ハストテシツコク
本使ニ繰返セルカ結局本件ハ外務ノ負トナリ本使帰巴ノ後
「クローデル」大使ト会ヘル際大使ハ日本カ強テ印支加入
問題ヲ主張セラルレハ「エタブリスマン」「ナビガシオン」
等末タ研究ヲ始メサル問題アル処是等ヲ研究シテ談判スル
トスレハ四、五年ハカカルヘシナト途方モナキ言ヲ為スニ
至レリ仏国側ノ此ノ態度ハ本使ノ了解ニ苦ム処ナルカ仏国
ハ印度支那ニ対スル日本ノ野心ヲ依然疑ヒ居ルニ非サルカ
ノ外ニ見当付カス果シテ然リトセハ税率問題片付クモ加入
問題又ハ日印特別協定等日本人ノ印度支那ニ居住營業スル
上ニ条約上ノ保障ヲ与フル結果ヲ来タスモノヲ取極ムルヲ
拒ムヤモ知レス目下「ブリアン」及「ベルトロ」ハ「ロ
カルノ」ニ在リ「クローデル」大使モ旅行中ニテ致シ方ナ
キニ付彼等ノ帰巴ヲ待ツノ外ナキ処大勢ハ前述ノ通ニ付此
ノ際本使カ如何ニ努ムルモ印支ノ加入又ハ印支特別協定問
題ヲ承諾セシメ得ヘクモアラサル様思考セラルルノミナラ
ス当方ヨリ余リニ是等ノ点ノミヲ主張セハ益先方ノ疑心ヲ
強ウスヘキニ付兎モ角モ右両問題ハ暫ク懸案トシ日印関税
問題ノミヲ進ムルコトト致シ度本月下旬ニハ貴電第二六一

ト挨拶セルニ対シ出来得ル限り希望ニ応スヘキモ本件ハ寧
ロ政治問題ナレハ巴里ニ於テ決定セラル可シト答ヘタル由

二二〇 十一月一日(着)

在中国芳沢公使ヨリ
幣原外務大臣宛(電報)

芳沢公使インドシナヨリ派遣サレタルキフエ
ル仏国専門委員ト会谈ノ際陸境関税問題ニ関
シ論及ノ件

第一〇二四号(極秘)

佐分利ヨリ左ノ通

印度支那ヨリ派遣セラレタル仏国専門委員「キフエル」ト
会谈ノ節陸境関税問題ニ論及ノ末

(一)仏領印度支那通過税ノ不公平ニ言及シタルニ「キ」ハ日
本ノ不平モ除カルヘシト答ヘタルニ付通過税ヲ全廃スル心
算ナリヤト問ヒタル処其処迄進ミ得サルヘシト答ヘタリ
右ハ現行ノ差別ヲ除キテ通過税ヲ一律ニスル心算ナルヤニ
認メラル尚

(二)「キ」ハ印度支那ニ於テハ仏印問題ニ付日本ニ対シ大ニ
好意ヲ以テ接シ居タルモ日本ノ提出シタル品目余リ多キ為
再ヒ危惧ノ念ヲ抱クニ至レルコトヲ力説セリ我方提案ニハ

比較的重要ナラサル品目モ相当アルニ付右品目ヲ出来得ル限リ少クスルコト必要ナリト認メラル

二二一 十一月二十六日、二十七日 在仏国石井大使ヨリ幣原外務大臣宛（電報）

大統領邸ノ午餐会後インドシナノ条約加入問題、関税問題ニツキブリアン外相等ト談話ノ件

第四〇二号（極秘）（十一月二十七日、二十八日接受）
往電第三九二号ニ関シ

二十四日大統領邸ニ余儀ナキ用務出来タルニ付午餐会ヲ二十六日ニ延シタシトノ交渉アリ右承諾シ置キタルカ次テ内閣更迭アリタルニ拘ハラス本日約ノ通り午餐会アリ宴後外相ノ許ニ商相、「クロデル」大使、「セルイス」局長、「レジェ」亜細亜部長列席本使トノ間ニ約二時間ノ談話ヲナセリ先ツ本使ヨリ印支問題ノ経過ヲ略述シタル後此レ迄仏国政府ハ印度支那ノ日仏条約加入ニ対シ税率ニ付キ困難アリトノコトニ付キ其ノ税率ヲ離レテ不取敢加入セラレタシトノ我提議ニ対シ仏国側ニ多大ノ困難アリトハ本使ノ了解シ

能ハサルトコロナリト切り出シタルニ「ク」大使ハ東京代理大使ノ来電ニ依レハ日本政府ハ加入問題ニ先チ税率ヲ議スルニ異議ナキ様子ナリシニ貴大使ノ言ニ依レハ然ラサルカ如シト述ヘ本使ハ税率問題ヲ議セサルニ非ス加入問題ニ対スル困難ヲ了解シ能ハサルヲ指摘セルナリ加入問題ト云フモ要ハ我国民ノ印支ニ於ケル入国営業ト我船舶ノ入港トニ対シ他国ト均等ノ待遇ヲ受クヘキ保障ヲ得ルニ外ナラス此ノ保障ナクハ税率問題ヲ解決シタリトテ何ノ役ニモ立タスト答フ茲ニ於テ「ブリアン」氏ヨリ石井氏ノ言ハ尤ニ聞ユルカ之ニ対シ商務省ノ腹藏ナキ説明アリタシト注意アリ「セルイス」氏長々ト説明アリ次テ彼ト本使トノ間ニ問答アリタルカ要スルニ過般「ナント」ニ於ケル或ル議員ノ演説ハ大ニ当国議會議員ノ注意ヲ惹起シタルニ際シ印支ニ於ケル日本人ノ商業ト「エタブリスマン」ヲ規定スル加入条約案ヲ議院ニ提出スルモ到底通過スル筈ナク畢竟加入問題談判ハ徒勞ニ終ルヘシト言明ス（「ナント」ノ演説ハ日印間条約成立ノ曉ニハ数十数万ノ日本人侵入シ来リ印支ニ重大ナル危険ヲ起スヘシトノ趣意ノ由ニテ「セルイス」氏ヨリ右演説ノ新聞切抜ヲ本使ニ送ル筈）

本使ハ印度支那ニ於テ日本ノ植民の侵入云々ハ十数年前ノ仏人ノ夢トノミ考ヘ居タリシニ今以テカカル杞憂カ議會議員ノ間ニ存在ストハ初耳ナリ然カモ尚其杞憂カ現ニ加入問題困難ノ原因タルヲ聞クニ及ンテ驚愕セサルヲ得ス吾政府カ加入問題ヨリ期待スル処ハ前述ノ如ク吾當業者ノ印支入国ト営業ト我カ船舶ノ入港トニ付第三国ト均等ノ待遇ヲ得ントスルニ他ナラス植民ノ如キハ我カ夢想タニセサル処ナリト繰返ス「ブリアン」氏ハ自分モ未タ「ナント」ノ演説ナルモノヲ知ラスカル杞憂カ基因ニアレハ之ヲ説明シ去ルハ自分ノ任ナリ只今石井氏力繰返ヘサレタル三箇ノ点ニ対シ吾側ニ於テ之ニ応スル能ハサル理由ナキ様思ハルルカ如何ト「セルイス」ニ詰問ス「セルイス」ハ結局日本船舶ト入国後ノ日本商人ニ対シ均等待遇ヲ与フルニ異議ナキハ勿論ナリト繰返ヘセルモ入国其モノニ対シテ何等言及セス即チ彼自身カ前記ノ杞憂ヲ抱ク事ヲ明証ス「ブリアン」氏ハ日本商人ノ入国ヲ拒ムカ如キ考ヘアルヘキ筈ナシカカルコトハ仏国政府ノ善意ニ依頼スルヲ得ヘシ就テハ仏国ノ承諾シ得ル最大限ヲ明文ニ認メテ之ヲ「セルイス」ヨリ石井氏ニ示サレタシト述ヘ「セ」氏ハ止ムナク之ヲ諾ス

次テ「セルイス」ヨリ日本船舶及入国後ノ日本人ニ対スル保障等過般提出シタル税率上仏国ノ大譲歩ニ対シ暫ク増税セサル旨及日仏条約改訂ノ際右大譲歩ニ報ユヘキ旨ノ言明ハ是非得タシト切り出セリ本使ハ日本人及船舶ニ対スル保障ハ当然何レノ国ヨリモ期待シ得ヘキモノニテ之ハ報酬ノ目的物トハナラス税率上ノ仏国ノ譲歩ハ譲歩ニハ相違ナキモ我政府ノ専門家ハ尚ホ幾多ノ希望ヲ提議ス之ハ不日會議ニ提出スヘシ我政府ハ真ノ譲歩ニ対シテハ日仏条約談判ノ際他ノ（不明）モ考慮ニ入ルヘキモ現行税率ヲ動カササル旨ノ声明ハ日本財政問題ノ全般ヲ拘束スヘキ重大ナル結果ヲ来スヘキカ故ニ到底約束シ得ス我国ニモ八釜數議會アリト報ユ「ブリアン」ハ石井子カ既ニ日仏条約談判ニ際シ仏国ノ譲歩ヲ考慮スト云ハレタル以上ハ其ノ他ハ殆ト政府ノ好意ニ信頼シテ可ナラスヤ兎モ角モ石井子ヨリ得タル言明振ヲ起草シテ「セルイス」ヨリ前段保障案ト共ニ石井子ニ示サレタシト述フ此ノ時内閣更迭問題ノ為メ政客外務省ニ馳セ集レルニ付閉会ス

上述スル所ヨリ御賢察セラルヘキ通り当国外務商務両省ノ意見ニ顯著ナル差異アリ「ブリアン」氏ハ無下ニ商務省ノ

意見モ押へ兼ネタル様子ナルモ談話中幾度カ大局上日印ノ關係ヲ急速ニ解決スル必要アルヲ述へテ商務側ヲ督促シタリ此ノ外商務、植民両省間ニモ暗闘アリ我ニ取ツテハ迷惑ナカラ今後談判ニ遷延ト困難アルハ覺悟セサルヲ得サル事情ニ在リ

二二三 十二月四日 在仏国石井大使ヨリ
幣原外務大臣宛

インドシナ通商問題ニ関スル日仏交渉ニツイ
テノ仏国ゴロー紙ノ批判的論調報告ノ件

公第七五九号

大正十四年十二月四日

在仏

特命全權大使子爵 石井 菊次郎(印)

外務大臣男爵 幣原 喜重郎殿

印度支那ニ関スル日仏交渉新聞論調報告ノ件

印度支那通商問題ニ対スル日仏間ノ商議ニ関シ当地新聞紙上ニ屢々露骨ナル反対論掲載セラルルコトハ其都度報告ノ通ナルカ今次又復十一月二十七日発行「ゴロー」紙ニ於テ Albert de Pourville ナルモノノ名ニテ日仏通商商

議ニ関シ左ノ如キ消極的論文掲載セラレ居レリ。何等御参考迄原文別添報告ス。

「各国ノ運命ヲ決スルモノハ戦争ノミニ非ス。平穩裡ニ行ハルル經濟戦争モ亦各国ノ運命ヲ決スルモノナリ」トテ先ツ經濟戦争ノ重大ナルヲ注意シタル後「今日日本ト仏国トノ間ニハ日本印度支那間ノ關稅問題ニ付交渉行ハレツツアルカ此ノ問題ハ頗ル機微ナルモノアリ。蓋シ大戰中極東ニ於テ連合國ノ為大ニ貢獻シタル日本ハ之カ報酬トシテ特殊ノ待遇ヲ与ヘンコトヲ吾人ニ要求スル処若シ吾人ニシテ之ニ応センカ屢々日本ノ商工業ト同一ノ物資ヲ取扱ヘル印度支那ノ商工業ノ大部分ハ破壊セラルルコトナルヘク又今日仏本國カ植民地ニ供給スル生産物ノ印度支那ヘノ輸出ハ近距離ニ存在スル日本トノ競争ニ堪ヘス結局殆ト全部消滅ノ悲運ニ陥ルコトナルヘシ。」ト述ヘ最モ打撃ヲ受クヘキ産業トシテ「アルサス」「ヴォジュ」ノ綿糸業ヲ挙げ「斯ノ如キ重大ナル國益ニ關係スル交渉ニハ宜シク事態ヲ明白ニシ且問題ニ精通セル有能家ヲ以テ當ラシムルコト当然ナルヘキニ日仏交渉ハ秘密裡ニ遂行セラレツツアリ。印度支那總督府カ事態ヲ明確ニセンコトヲ求ムルトキハ外務省ハ

モ影響スヘキ本件交渉ニ付適宜前記印度支那委員會ニ諮問センコトヲ希望ス」ト結ヘリ。(西村官補起稿)

二二三 十二月十二日 在仏国松島臨時代理大使ヨリ
幣原外務大臣宛

インドシナ關稅問題ニ関スル日仏交渉反對論
報告ノ件

公第七七五号 (大正十五年一月十五日接受)

大正十四年十二月十二日

在仏

臨時代理大使 松島 肇(印)

外務大臣男爵 幣原 喜重郎殿

印度支那關稅問題ニ関スル日仏交渉反對論ニ

付報告ノ件

本ノ殆ト全部ヲ代表セルモノナリ。
吾人ハ茲ニ仏國植民地最モ富源ニ充テル印度支那ノ運命カ斯クノ如ク緘黙ノ間ニ決定セラレ印度支那ノ一般の希望カ無視セラルルコトハ到底忍フコトヲ得サルカ故ニ此際当局カ印度支那ノ将来ノミナラス太平洋ニ於ケル仏國ノ地位ニ

印度支那關稅問題ニ対スル日仏間ノ商議ニ関シ予々當國利害關係者側ヨリ其意見聴取方ニ付政府ニ警告ヲ發シ居リ殊ニ十二月四日付公第七五九号ヲ以テ報告セル「ゴロー」紙ノ記事ノ如キ要求アルコトハ既報ノ通ニシテ本月八日下院植民地委員會ハ商務大臣ニ対シ「印度支那關稅問題ニ対スル日仏交渉ハ利害關係者ノ意見ヲ聴取セスシテ之ヲ行フヘ

カラス」トノ趣旨ノ建議ヲ為スニ決定セル趣ノ処之ニ先チ十二月三日及四日ノ「ラ・デペーシユ・コロニアル」ハ大要左ノ如キ記事ヲ掲載セリ

十二月三日「ラ・デペーシユ・コロニアル」

「外務省ハ支那動乱ノ印度支那ニ波及センコトヲ危惧スルノ余リ日本ニ印度支那防禦ノ任ヲ託シ代償トシテ植民地住民ノ意向ヲ無視シテ之ニ印度支那ニ於ケル経済の特権ヲ与ヘントス之レ印度支那ノ利益ヲ輕視シ仏国ノ極東ニ於ケル地位ヲ左右スルモノニシテ斯ル重大問題ニ関シ利害關係者ノ輿論ニ耳ヲ掩フハ果シテ正当ナリト云フヘキヤ印度支那ヲ保全セントシテ之ヲ日本人ニ託スルモ日本人ノ機敏ナル早晚印度支那ヨリ仏人ヲ一掃シ終ルヘシ外務省ノ政策ハ奇怪ナリ」云々

十二月四日「ラ・デペーシユ・コロニアル」

「若シ政府ニシテ政治的理由ヨリシテ日本ニ印度支那ニ於ケル経済の特権ヲ与フルノ必要ヲ感スルナラハ仏本国並植民地ノ主要關係商工業者ノ意見ヲ求メタル後ニ之ヲ為スヘシトノ吾人ノ要求ニ対シ前植相「アンドレ・ヘッス」氏ハ之ヲ諒トシ日印関税問題討議ニハ印度支那商工

業委員会ヲシテ会員中ヨリ二名ノ代表者ヲ指名セシメ之ヲ該交渉ノ顧問トナスヘキコトヲ正式ニ約束シタリ然ルニ今日現政府カ該約束ヲ守ラス日仏交渉ニ該委員会ノ参加ヲ許ササルハ驚クニ堪ヘタリ前記約束問題ハ別トスルモ「メルラン」「キルシェ」諸氏ノ訪日ニ際シ印支関税問題討議ニ日本側ヨリハ外交官ノ外主要実業家代表ヲ出席セシメタルニ鑑ミ仏国政府ノ此ノ秘密主義ハ日本ニ比シ仏国当業者ノ地位ヲ劣弱ナラシムルモノナリ

政府ニシテ関税問題交渉ニ付關係商業會議所並諸団体ニ諮問セストセハ如何ナル情報ヲ醸スヘキ乎議會ハ之ヲ承認スヘキ乎植民地ニ活動スル仏国人ハ其ノ利益カ熱帯地ニ在ルノ故ヲ以テ黒人奴隸同様ノ待遇ヲ受クヘキ乎印度支那商工業委員会ハ政府ノ必要トスル場合ニハ其諮問機關タリシカ今日該委員会ハ其特権ヲ剝奪セラルヘキ乎」云々

下院植民地委員会ノ前記決議カ右新聞記事等ノ影響ヲ直接受ケタルモノナリヤ否ヤハ別トシ当国ノ一部人士カ今尚熱烈ナル反対運動ヲ試ミ居ルノ事実ヲ窺知セラルヲ以テ何等御参考迄右茲ニ報告ス

事項八 米國ニ於ケル排日問題

——移民法実施ノ影響——

二二四 五月一日

在サン・フランシスコ武富総領事ヨリ
幣原外務大臣宛

親日運動ニ対スルマクラッチーノ駁論ニツキ

報告ノ件

公第三〇三号

(五月二十九日接受)

大正十四年五月一日

在桑港

総領事 武富 敏彦(印)

外務大臣男爵 幣原 喜重郎殿

National Committee on American Japanese
Relations 宣伝運動ニ対シ V. S. McClatchy

駁論ノ件

Wickersham, Gulch 博士等 National Committee on

American Japanese Relations カ四月八日付書面ヲ以テ加

州方面ニ対シ同会入会方ヲ勧誘シ来レルニ対シ California

八 米國ニ於ケル排日問題 二二四

Joint Immigration Committee ノ書記 V. S. McClatchy

ハ要領左ノ通り駁論致居候

親日宣伝ハ米國內ノ各所ニ於テ宗教団体、商業団体並ニ平和団体等ニ依テ新聞雜誌又ハ各種ノ集合ヲ利用シテ行ハレツツアルモ右親日運動ノ目的ハ歸化不能ノ亜細亞民族ヲ排斥スル一七九〇年以来ノ米國國是ヲ放棄シテ日本人ヲ歐洲人ト同様「クォーター」制ノ下ニ入国セシムル様現行移民法ヲ改正セシコトヲ一般市民ニ宣伝スルニ在リ而シテ是等運動ノ主唱者ハ何レモ日本ト特種ノ關係ヲ有スル人物ニシテ「ウィッカーシャム」ハ昨年三井物産カ飛行機收賄事件ニ連座シテ取調ヲ受ケタル際ノ弁護士タリ Hamilton Holt ハ初メテ Japan Society ヲ設立シタル功績ニ依リ日本政府ヨリ叙勲セラレタルコトアリ

此等ノ人々ハ何レモ事實ニ就テ正確ナル報道ヲ欠キ居ル人々ニシテ國家ノ安寧ト威信トヲ外國人ノ幸福ヨリモ以下ニ